▲炭礦に六時間勞働制實施？

六月下旬、全露各經濟及勞働課長會議で一當局は

「七時間勞働制採用後、就中紡績工業に於ける成績は極めて良好で、七時間勞働が合理的であることを首肯せしめた」

と報告したが、鑛山勞働者同盟の中央委員會は、坑內作業勞働者の六時間制度實施に關する緊急會議を召集し、今日までの狀況に鑑みて先づ二鑛區だけを即時六時間制度に改める旨を決議した。猶他の炭礦全部に亙り、原價を引上げることなくして六時間制に改め得る期限に關し、各々豫定表を作製したと。

ロシアだより

■マッソン派の檢擧　サウエート新聞記事によると最近レニングラード市では十數名の石工より成るマッソン結社がゲ・ペ・ウの手で發見された。同結社は所謂中世紀時代のやうな無害な厭世家の集合ではなく、サウエートに敵意を有する反革命分子をも團員として秘密に反革命運動を畫策してゐた。右の外にマルチン派なる結社も組織され、多數の婦人まで加入してゐるが、これも反革命的のものだと。

■ドン炭坑反革命事件の判決　最高裁判所から最高社會保護手段として死刑を宣告された被告中ペレゾフスキイ他五名に對し、聯邦中央執行委員會幹事會は大赦令を適用して九ケ年の自由拘束（懲役）五ケ年監視付とし、全財產沒收に減刑することに決裁を與へた。但しゴルシツイキ外四名は最高裁判所の宣告通り死刑執行の承認を與へた。

■新紙幣發行　サウエート政府は今回（額面二チエルウオネツ（二十金貨留に當る）の新紙幣を發行した。

■郵電大學　レニングラード市では目下全聯邦郵便電信大學創立の準備中であると。

■國際勞働大運動會　來る八月十一日から廿二日迄莫斯科に開かれる參加者四千名といふ大掛りなもの。

■ロシア文壇消息　マクレム・ゴリキイは「クリムサムギン」を出版、ユオレシヤは「感情の反逆」を、ニ・アシユーキンは「思ひ出す人々」を、ガイドフスキイは「高原への道」を出す。またヤロウオイは「黃ろい太陽の聽罪」を發表、女流ではインベラが「世にない子供に捧ぐ」といふ詩集を出した。

十二、短篇小說及諷刺短文集

露西亞諷刺文學

緒言

歐洲に於ては、諷刺文學は文學界に非常な優越的地位を占め、過去現在を通じて重大なる役割を演じて居る。

諷刺文學は英國を元祖とし、漸次各國に流行し出したのであるが、元祖の英國では十八世紀初期頃盛んに諷刺專門の雜誌が發刊されて居た。ロシアでも十八世紀中頃に至り、文藝の特殊體として諷刺文學が世に行はれ、**エカテリナ**女皇時代初めて作品が世にあらはれる樣になつた。一七三九年ロシアで**フシャーカヤフシャーチナ**と稱する最初の諷刺文學雜誌が刊行され女皇は親しくその衝に當られたのであつた。同年ロシアで有名な文士、**ノーウ井コフ**は**トルーテン**といふ諷刺文學的雜誌を別に發行した。これよりロシアに諷刺文學

熱が盛んになり、十九世紀初頭に至つてはどの新聞に於ても、**マーレンキイフエリエトン**欄即ち社會の缺陷とか人物に關する諷刺、就中政府要路の人物に對する諷刺や政府各機關に對する諷刺的短篇を載せないものはない程度にまで發達したのである。一九〇五年にはロシア諷刺文學雜誌中屈指の**サチリコン**誌が發行された、本小册子にも譯文が二三揭載されて居るが、故**アウエルチエンコ**氏が同誌を賑やはしたのは文學通諸士の夙に知るところである。當時には今日尚現存して居る**ブホフ・テツフ井**其他の名文士が續々世に現はれた。

一九一七年革命以後物質萬能主義が一世を風靡し、胃袋と財布を充すことに汲々たる時代となつた結果、文學界も自然影響を蒙らぬ譯には行かなかつたが漸くにして難關を突破し、文學就中諷刺文學は惡風潮に超然たるを得たのであつた。

赤いサウエートロシアの中央にも、又世界各國に散住する避難民中にも諷刺文學の大家は數多ある、サウエートロシアでは**クロコヂル**と稱する諷刺文學雜誌が發行されて居るが、それはサウエート國家や固有の慣習社會狀態の缺陷に對し深辣な皮肉を列べて居る。**ブラウダ**紙さへも**コリツヲフ**といふ諷刺文學の大家を抱えて、現代ロシアの諸缺陷に對し輕妙な諷刺を以て批判攻擊をなさしめて居るのである。

尙サウエートロシアには諷刺文學の大家とも言ふべき詩人**デシヤンベートヌイ**氏がある。彼は詩文體ばかりを書いて居る、**イズウエニチヤ**紙上にも近頃いゝ諷刺文學者が執筆する樣になつた、避難民亡命者間には今は故人となつたが**アウエルチエンコ**氏の右に出づるものはあるまい、今巴里にある女流諷刺文學者**テツフ井**女史は白系新聞に時々執筆して盛んに紙面を賑はして居る、女史は數册の小册子も世に出した。

斯くの如く諷刺文學は時と共に益々隆盛を極め、權威あるものとなつて來た。革命後のサウエート世相を知るべくは、この諷刺文學に倚ることが最も捷徑であらう。

創作監督

アウエルチエンコ

譯者註、諷刺文學者中第一流大家とも謂ふべきは、アウエルチエンコ氏であらう。氏が文學界に身を投じたのは一九〇一年であるが、短時日の間に文名は隆々として讀者間に喧傳さるゝに至つた。

諷刺文學的物語や、短篇物を世に出した外に、ロシアでユーモアとサチール雜誌の王とも云はれた「サアチリコン」誌を發行して居た當時のアウエルチエンコ氏の評判は大したもので、ア氏は帝政ロシア貴族社會の缺陷を巧みに諷刺し、輕妙な皮肉の筆致は、讀者の心を捉ふるに充分であつた。革命後、ア氏は文藝壓迫のサウエート治下に居住するを快とせず、西歐(伯林)に走り、共產主義攻擊の書籍八册を發行した。

ア氏の諷刺文學に於ける銳鋒は何人も尊敬する處で、一九二〇年中、レニンさへも「斯の如き文筆の大家が敵側にあるのは悲しむべき事である、もし我々の味方として働いて吳れたならば偉大なる力であるのに」と嗟嘆したといふ。

ア氏は一九二五年三月十二日巴里に客死した。ロシア諷刺文學界のために惜しむべき人物であつた。

地上の一角から極樂を覗くものは、第三インターナショナルであらう。ところで創作監督と云ふものがある。どんなものだか次に說明しやう。

著述家が書齋の椅子に腰を卸すとすぐ

「勞働者が來ましたが………

「何の用か知らんが兎に角通し給へ

勞働者連がはいつて來る。

「何か御用ですか？

「僕等は創作監督に選擧された者です

「監督？　何の

「貴方の監督です

「私は物語りや、小品文を書く者ですが、別に私の身邊に監督はいるまいと思ひますが

ね
「貴方はさうお仰つても、僕等は印刷職工や新聞配達人達から選擧された者で貴方の創作を監督する權利を持つてゐます
「チョツトお尋ねするが諸君はどんなにして私の創作を監督しますかね
「そりや譯はありませんよ、僕等は貴方の周圍に坐ります……して貴方は今何を書くつもりですか
「何をつて、まだ頭に浮びませんよ
「じや早速考へて下さい
「よろしい、諸君が出て行つたら考へませう
「そりや困ります、そんな面倒かけないで今直ぐと考へ出して下さい
「駄目です、二人も傍に居られちや考へもきまらんし筆も執れませんよ
「チョツト待つて下さい、僕達は傍觀者じやありませんよ、勞働者から選出された貴方の監督者ですよ、サア

「何がサアですか
「早く考へ出しなさいと云ふんですよ
「だつて諸君は解りますか、すべて創作と云ふものはよく考へた上でやらなくちや……
「そこ／＼、よく考へんでもいゝから明らさまに監督者の前にさらけ出して下さい
著述家が當惑してゐると監督は又、
「どうして貴方はそんなに考へるんですか
「邪魔しちや困りますね、今題目だけでもと考案中ですから
「じや早く思ひついて下さい、サアまだですか
「どうして又そんなに私をせき立てますか
「憚りながら僕達は監督です、無駄に時間をつぶしたかアありません、サア早く……
「困りますね――、諸君がさうひつきりなしに傍からガヤ／＼云つちや頭が纏りませ

んよ」

勞働者達は靜かに瞑想してゐる著述家の顔を物珍らしげに見守つてゐる、著述家は指で髮を捋つたり梳つたりしてゐたが、最後に小さく咳拂ひして失望に陷ちる。

「駄目です、山羊の四つの目が新しい門を覗凝るやうに私を見すえてゐると思ふと何にも頭に浮びません」

勞働者代表の監督の一人は相棒を顧みて、

「コリヤ箆棒なサボタージュだ、話は仕かけるな、顔を見て居ちやいかん……此の調子だと息をするなと言ひ出すかも知れん。オイ作者君、巫山戯たことを言ふない、たれも見てゐない時にはよく書けて、人が見てゐて不正が働けん時にや何も書けないと云ふんだね……ヨシ此方だつて考へがある」

監督達は心底から侮辱されたものと思ひ込んで、床を蹴つて起つて行つた。

作者より

昔は斯樣な夢を見たゞけでも文筆家は、寢汗にびつしよりになつて目を覺ましたであらう、だがわれ〲は斯樣な現實の裡に昔の夢を體驗しつゝ既に六年目だ、寢汗も出なくなつた。（完）

取消し文例

貴紙村落通信欄に御掲載の小生に關する記事、乃ち小生が平常馬の如く酒を飲み、また婦人を絶對に家中に入れしめざる男なりとの記事は事實無根にて、小生は全く酒を飲まず、また婦人は小生の承諾を經ずとも勝手に室內に侵入致し居候

集會

アウエルチエンコ

モスクウイチが家で靜かに菓子とパンとで茶を喫んでゐると、戸を叩く者がある。間もなく武裝した、政府の役人の一人がはいつて來た

「オイ、タワーリシチ、サア集會に出掛ける用意をしてくれ、君が聞いてくれる番だ

「戯談(じやうだん)いふな、俺は先週聞いたばかりじやないか

「だつて今度は別だ、タワーリシチ・トロツキーが演説するんだから、時事問題でな

「マアよく聞いてくれ、俺はトロツキーの言ふことなんかチヤーンと知つてるよ、きまりきつた事サ、帝國主義を罵倒してだ、來週は世界革命を論じます、でお仕舞ひだ、俺は知つてるよ、馬鹿々々しい、行けるもんか

「そんなことは俺の知つたことじやない、俺は千六百四十の聽衆席の埋まるだけ聽手を驅り集めて來いと命令されたんだから

「そんなら隣りに行つて見たまへ、エゴロフとかいふ男が居るよ、彼奴は久しう聞きに行かん筈だゼ

「イヤ彼奴は二度も集會をずらかりやがつたんで、もうとつくに保安部に引つ張られてるよ、だから君に順番が廻つて來た譯サ

「俺は手が痛いんだよ

「マアさう云ふな、薪割りさせられるのたあ違ふぜ、チヤンと坐つて、阿呆になつて聞いてさえ居りやいゝんだ

「インヤ、掌(てのひら)に發疹(はしか)が出來てるんで、それに風に當てちや惡いんだよ

「そんならポケツトに手をつゝ込んでりやいゝやな

「それじや拍手が出來ないじやないか、拍手せないとソラ例の……

「ナーニ痛くない方の手で自分の頸筋でも叩いときやそれで役目はすむよ

モスクウイチは暫し默つてゐたが思ひ出したやうに、
「あゝ、さう〳〵、こつちの長屋にパンテリエフつて男がゐるよ、彼奴に當つて見たまへ、彼奴と來ちや集會好きで、何時だつて聞きに行つてゐるよ
「お生憎さま、彼奴は三日前に叩き込まれてるんだよ、なんでも演說聞きながら居眠りしやがつたんだとさ
「戲談じやない、俺だつて居眠りすりや大變だ
「大丈夫、叩き込まれたら目が醒めるよ
「ハヽヽヽ、大笑ひだ
處でタワーリシチ、一杯ウオツカをひつかけ給へ、
「そりや濟まんね、早速御馳走にならうか、實際やりきれないよ一日中驅けずり歩いてるんでね、かうして聽衆を勸誘してまはるのも並大抵の苦勞じやないよ。家内がお產してるから行けないの、公務が形付かないと駄目だの、留守をつかはれたりしてさ、

集會と云つたらまるで毛蟲のやうに嫌はれるんだ。
つひ此の間も或る處でサ、どうぞ勘辨して呉れつて泣き乍ら賴まれたんで困つたよ。
なんでもトロツキーの演說聞くと頭が痛くなるんださうだ、その上人混みの中では、むせて、嘔き氣を催ほす癖まであるちうんでね、女房までが此の俺を拜みやがるし、子供は親に抱きついて泣き出す始末でね、氣の毒になつちやつてつひ貰ひ泣きしたよ。汝はサウエートの自由市民としてトロツキーの演說を聞くの義務あり、その代り自由を附與す！　だとサ、ウンザリするよ、ところで君出席してくれるかい
「チヱッ、また長い演說でもやられちやたまらんよ
「長いことはないだらう、一時間半か、二時間かな、まあ我慢して呉れ、それで君も義務を果たし、俺も役目が濟むと云ふ譯だから、トロツキーの後でブハーリンが洪牙利の何とか云ふ詐欺師の事を話して引續いて聽衆の意見發表……
「オツトツト、大方そんなことだらうと思つたて、たまるかい聽衆の意見發表と來た日

にや馬鹿げてゝ、長たらしくてさ

「イヤ、それは心配いらん、チヤンと印刷物が出來てるから

武裝した役人は、鐵砲を傍において、鞄の中から灰色の印刷物を出してモスクウイチに渡した、モスクウイチは眼鏡をかけて讀み始めた……印刷物には「本會に參集せる我等千六百四十名の者はトロツキーの演說に共鳴しサウエートの内外政策に贊成するものなり」とある、モスクウイチは自分の外千六百三十九名の者共が順番に贊成の署名をする光景を頭に描いて見て、上衣の釦がちぎれて落ちた程太い嘆息をした。

國防週間標語

勞働婦人よ、農村婦人よ、國防の準備に就け!! 射擊を習得し、衞生隊員の業務を修めよ。

楽屋裏

トルチヤーニン

場所、莫斯科クレムリン宮殿内。

トロツキー「今日、諸君に集つて貰つたのは外ではない。國際聯盟の連中が露西亞に來ると云ふんでね、いやなことだが御相談せうと思つて……

ルナチヤルスキー「何にしに來やがるんだらう……

ペテルス「何ですね用向は……

トロツキー「イヤ、それは今御話しするがね、來るとなりや歡迎の準備もせにやならんので諸君に來て貰つた譯さ、ところでペテルス君、委員共はきつと特別警察署を見たがるだらうと思ふがね拔け目なくやつてくれたまへ、留置場にブチ込んである奴等ぁ痩せこけた奴や、饑ゑきつた奴や、毆られた跡がみゝず腫になつてゐたり、血を流した

ま丶の奴等ばかりだから何とかうまく胡麻化しておかにやなるまい

ペテルス「血を流してる奴は白墨汁でも塗りつけることにしませう

トロツキー「マア然るべくやつてくれ給へ、またブチ込んでる奴共には一寸小ざつぱりした着物と着換へさして置いて、委員共が來たら早速露西亞ダンスの一つも踊らせてもいゝね、而しうまく言ひ含めるのが骨だらうて

ペテルス「ナーニそれは雜作ありませんよ露西亞流、佛蘭西流、西班牙流の踊りを御好み次第にやらせますよ。

トロツキー「それから君の處にはいろんな拷問道具があるね、ありや何とか形付けて置かんと又外國の新聞などで書き立てられると厄介だからね

ペテルス「大丈夫、拷問道具をしまつてある部屋は運動具倉庫といふやうな貼紙して置きますよ、英國人は運動好きだからいゝ印象を與へるでせうよ

トロツキー「だが上手にやつてくれ給へ、物好きな英國人にでもブツつかつてサ、一つ此の運動道具を使用して見給へなんか云はれて尻込みせんやうにね……ルナチャルスキー君もよろしく頼むよ、學校はあつて生徒が非常に少いやうだね、此の間も一寸立ち寄つて見たら女學生が男生徒の膝に掛けてコカインを嗅いでゐたよ、あんなところをへうきんな佛蘭西委員にでも見つけられると學校を何處かと間違へて踊り出したりするからね

ルナチャルスキー「イヤそれは貴方（あなた）の言はれる通りで學校は全く自由の天地ですからね、帝政時代には學生が惡戲（いたづら）するとよく男と女を一緒に並ばしたものですよ

トロツキー「ダツテ君、昔は昔、今は今サ、それから君の管轄の衞戍司令官に注意してくれ給へ、市民共はルバーシカの上にチョツキを着て下には何も着て居ないんじやないかね

衞戍司令官「ハツ、私は此處に居ります……國際聯盟の委員が來たら市民全部を町から追ひ出して協同苦役に使ひます。

トロツキー「だが委員達が往來で通行人をつかまへて訊いたら、みんな滿足な生活をして居ますと答へるやうによく言ひつけて置かねばならんね、若しきかない奴は早速叩き込んでしまつた方がいゝね

ペテレス「細工は粒々です、不服な奴は例の運動具倉庫にほうり込んでやりますよ

トロツキー「さうか、そんなら俺の方では肥つた愉快さうな奴を百人ばかり市民の中から選り出して、委員の來る迄ウント滋養分を喰はせておいて、委員共が來たら其のまわりをウロ〳〵させやう、カール・マルクスのメダルでも頸にさげさせてね、さうすりや外國人も露西亞の共産主義を理解するだらうよ、而し不都合な奴は今の内に首に麻縄をかけてやらうと思ふ、さうなりやペテルス君の手を煩はさにやならんからよろしくたのむよ

ペテルス「承知しました

トロツキー「思ひ出したが、昔は警察で澤山の街燈を立てたもんだが、今じや革命家の記

念像の方が街燈よりも多い位ひだ……御互ひは一向構はないが外國人に見せるのは何んだか具合が惡いね、こりや一そのこと除けた方がいゝかも知れん、碌でもない記念像はみんな除けてしまつて何處かに立派なのを一つ建てやう

ルナチャルスキー「すると、貴方(あなた)のはどうしませうか

トロツキー「僕の分は殘して置き給へ、臨時にガルバルヂー記念像とでも貼紙しとくサ

ルナチャルスキー「而しガルバルヂーには長い顎鬚がありましたが…………

トロツキー「そりや長く經つたことだから刈り取ることも出來たらうよ、では諸君これで散會とせう、喜劇だつたね

ルナチャルスキー「いや、喜劇はまだですよ。國際聯盟の委員が來てから始まるんですよ。

死に直面して

トルチャーニン

露西亞人と佛蘭西人との心理にどれだけの距たりがあるかと云ふことを例を擧げて比較して見やう。

巴里の革命家達が偶々モーリ僧正を捕まえて直ぐと僧正を街燈の柱に吊り首しやうとしたことがある。

「善良なる市民等よ、諸君は愚僧をどうしやうと云ふのじや

僧正は觀念しながらもかう訊いた。

「お陀佛さしてやるんだ、街燈柱と心中させてやるんだ

「さやうか、諸君は心からそれで愉快か

僧正の最後の此の一語は血の氣の多い純佛蘭西人で、又生粹の巴里ッ子たる革命家だちの

胸を射た、僧正は奇しくも命を助かつたのである。

之に對して露西亞での例はどうか。

ハリコフ市の特別警察吏タワーリシチ・サーエンコは獰猛の限りを盡して市民を戰慄させた。或る夕方、サーエンコは熟柿のやうな酒氣を吐き乍ら拘留所にやつて來て、其の晩の中に銃殺る犯人達を點呼した。

呼び出された犯人達は素直にサーエンコの前に並んだが、もう誰一人として歎願したり泣き出したりする者はなかつた。どうせサーエンコのやうな冷酷な鬼のやうな奴にかゝつてはお仕舞だと皆が諦らめてゐるからであつた。

義勇軍がハリコフに到着する二日ほど前だつた、サーエンコは何日もの通り、其の日血祭りに上げる犯人達の點呼をした。

「アキーメンコ

「ハイ

「こつちに來い

「ワシユコフ

「ハイ

「お前も其處に並べ

「チョット待つて下さい、私は………

「ナニツ、變な奴だな、愚圖々々云はずと出て來い、次はコルモオイだ

「ヘイ

「モルチヤノフも出て來な

「此處に居ります

其處に居るなあ判つてる、出て來いと云ふんだ、ニコリスキー

返事がない。

「オイツ、ニコリスキー

矢張り返事がない、だが居ないのじやなかつた、その時ニコリスキーはサーエンコの眞向ふに坐つて、乾いた唇から兩切煙草を放さうとしてゐた。だが、煙草の卷紙が唇にクッ付いて、急に引つ張ると痛さうだつたから返事にまごついたのである。サーエンコはもう癇癪玉を破裂さした。

「コラツ、ニコリスキーは居ないのか

ニコリスキーは急いで煙草を放したもんだから卷紙は破れて唇に殘り、煙草の粉が舌に着いたのでペツと唾を吐きながら云つた。

「タワーリシチ・サーエンコ、同じ人間を二度も殺すなんてそりや無理だらう

「どうして

「だつて昨日ニコリスキーを呼び出して銃殺したじやないか

「さうかい

サーエンコはさも不審さうに鉛筆でニコリスキーの名を消して、

「お前は誰だつけ

「俺は俺さ

「よし、パストーホフ

と、サーエンコは次の順番を呼んだ。

二日後に來着した義勇軍はかうして生き殘つたニコリスキーを救ひ出した。

諸君はどう思ひますか………

モーリ僧正のやり方が氣に入る人もあらうが、自分は同胞ニコリスキーの方がすきだ。僧正のは最期の捨て言葉だつたのだ、がニコリスキーは洒々然と大膽にやつてのけた。少くとも僧正が色青ざめ、震へてゐたらうと思はれる點が我がニコリスキーの態度には見出せなかつた。

未來小說の中から

トルチヤーニン

ポリシエウイキは完全に全露西亞を征服してしまつた、隣接諸國は露西亞との國境一帶に高い頑丈な障壁を作り、其の上に又刺(とげ)の生えた針金で嚴重な鐵條網を張りまはし、五十步每に「無用の者入るべからず」と立札した。

露西亞の方からも、出國は無論のこと、商賣も、信仰も、法律も、敎育も、藝術も一切合財他國との交涉を嚴禁してしまつた。

怠惰な兩腕は髪も梳らず、顏も洗はないので、頭髪は延び放題だ、だから髪の中にはいろんな蟲がわくやうになつた、丁度大昔の森林の中に狼や、熊や、狐や、野牛や、鹿や、馴鹿などが無數に棲息したやうに………。

猪の群は時々風塵を捲いて織物工場、製紙工場の建物の跡に現はれては、灰色の小兎を

追ひ廻はし、鷲は硝子が破れたり、煙突が壊れてゐる測候所に巣をつくつた………舊莫斯科大學には恐ろしい支那馬賊が根城を構えて近傍を何時も震駭せしめてゐる。

國民は三階級——三種族といつた方が適切だらうか——に區別された、執政官族と、執行委員族と、義務勞働族の三通りに………。

執政官族は長くもタツタ卿一人だ、絶對權力者ソフデービ・ミーシヤ一世様で、亡くなれた絶對權力者リエフ一世の世嗣ぎで、トロツキーの血統をひいてゐられる方だ、世の中は何時の間にか、王政と變はり、リエフ一世薨去の時には、莫斯科王家代々の御墓所に葬られたが、王政復古も內々で行はれたので、人民共は誰も氣がつかなかつた。

執行委員族となづくる種族は、早い話しが軍人見たいな種族だ、此の種族の生殺與奪の權は絶對權力者たるミーシヤ一世が握つてゐるのである。

最後の義務勞働族といふのは宿命的に世の中の下積みで、何時も勞働し、穀物を作り、鳥獸を山野に獵し、獸毛から反物を織り、酒を釀造するのであるが、その勞働の代償とし

て、ありがたいことには一生の間、生産高の三分の一だけは執行委員會から頂戴することになつてゐる、あとの三分の一は執行委員會が取り、殘りの三分の一は人民委員會議長たるミーシヤ様に上納されるといふ仕組みだ。

市民は大概、土小屋か或は馴鹿の皮で作つた天幕に住み、その他は古木の空洞とか、巖窟を家とし、又山野を驅け廻つて猪や、熊を獲つてる者もある。

ある年の天氣晴朗なる或日の事である……大森林の端しの方、古木の根が折り重なつてゐるところに、何かしらグツ〳〵煮たつてゐる釜を眞中に、昔風の着物の襤褸を纏ふた、痩せこけた、顔中皺だらけの一人の老婆と、狼の皮を綴りあはせたものを着た二人の少年とが木の根に腰をおろしてゐる、彼等はめい〳〵銳利な手斧を横に置いてゐる。

「兄貴は何處にいつたんだね？

と、黄ろい齒で狼の骨をしやぶりながら婆さんが訊ねた。

「彼奴はね、人民委員會議の議員においらが出してやつたんだよ、おいらの仲間で國際

主義者の社會革命黨の奴を何匹かとつゝかまえたんでね、そ奴等を喰つてしまふか、それとも社會革命黨の方に捕虜になつてる、おいらの共産黨仲間の若いのと交換しやうかつてね、今頃論判してるころだよ。

「さうかい困つたもんだね、何時になつたらいやな戰爭が無くなることかね……ところで兄貴はどうかして其の社會革命黨の奴をやつゝけて、肉の一きれも持つて來て呉れるといゝが

「さう、おいらも實はそれを心待ちに待つてるんだが……そりやさうと、半年も前だつたかな、皆な覺えてるだらうが、英吉利人の奴が壁から落ち込んで來やがつた時な、とつゝかまえてグチャ〳〵に叩き碎いておきながらサ、指の半分も持つて歸らんかつたね、惜しいことしたもんサ……時に親父は獵から歸つて來るだらうか

婆さんと孫とが話しあつてるのだ、婆さんが答える。

「心配しなさんな、親父だつて時が來りや歸つて來るよ、一日に東から六ぺんも日は出

ぬから……時にお前の手に握つてるのは何にかい

「ウン、さつき森の中で見つけたんだが、さつぱり何かわからんよ、胡桃の實見たいな可笑しなもんだよ

「一寸お見せ

婆さんは孫から珍品を受取つてながめてゐたが

「なあんだい、こりや螺旋止めじやないか

「螺旋止めつて何のことかい

「こりやお前、昔しレールとレールを繫ぎ合はせるときに使ふ太い釘を拔けないやうに填めたものだよ

「レールつて何んだい

「鐵道よ、鐵の道よ

「フーン、だけど、どうして鐵で道が作れるかい、澤山つなぎ合はせでもするのかい。

婆さんは孫が鐵道を知らないのも無理はないと思つてニコ〳〵しながら、

「さうなんだよ、鐵でレールを作つてね、ながーい棒をな、その上を鐵の家が途方もない速さで走るんだよ、人間の九倍も早くな

「さうしたら馬が何匹位いるかい

「馬なんさいるもんか、水を釜の中に入れてさ、薪を焚くと走り出すんだ、馬なんさいりやせん

「誰がそんなものを作つたんかい

「インゼネル（技師）が作つたんだよ

「インゼネルつてお美味いかい

「さあ喰つて見たことはないが、わしの若い時にインゼネルと結婚させられやうとしたことがある

「なあに結婚つて

「お前にはその言葉は判らん、結婚したことがないから、結婚を申し込んでことわられたのサ、出した手を振り拂はれたのサ

「詰らんな、向ふが手を出したら喰つて見たらよささうなもんだ、手の味は惡くないよ

「お前と話しをするのは仲々むづかしいよ

婆さんは若かつた昔のことを思ひ出して柔かい微笑を皺顏に浮べて、

「インゼネルがわしに書き付けを寄越したのよ

「書き付けつて何かい

「さう〳〵まだ知らんだらうね、ブマーガ（紙）に記號をつけたもんだよ

「ブマーガ？　可笑しな言葉だな。

「お前見たことがないかい、家の寶物の中に電車の切符がある、いつか見せてやらう、おれが紙といふものだよ

話の種もだん〳〵盡きて、沈默が始まらうとする。とその時、係の一人は笑ひながら、

「昨日は面白かつたよ、何時も見ない人が隣りの女の髪をひつぱつて森の中につれて行かうとしたよ

「よくあの女の色が默つてゐたなあ

「いんや、承知せんさ、執行委員會に手續もせないで、あんなことをしやがつたと云ふんで訴へに行つたよ

「その納まりはどうなつたね

「いつもの通りさ、闖入者は御法通り手斧で叩き殺され、女は樹に縛りつけられてよ、髪の毛をすつかり拔かれてしまつたよ

「あゝ、いたましいローマンスだ

「な、な、なあに

だが、婆さんはひとり、沈默して過去を瞑想してゐる。すべては沈默した、遠く森の中で馴鹿の啼き聲と、猛鳥に捕へられた小鳥の悲鳴とがこだまする。

外交官

彼は痩せてこそゐれ、骨つ節の強い、勇敢な、赤軍の騎兵であつた。で單騎敵軍のまつただ中に突進し、高らかに凱歌を奏しつゝ歸陣したこともあつた。

「戰ふ時にや、勇敢で、そして沈着でなくちやいかんテ

と、思ひ出した彼は、顏を剃らせながら、窃かに下唇を噛みしめたり、兩肩を怒らしたりして見た。

「糞ツいま〳〵しい。俺はなんて剃刀が怖いんだらう、薄氣味が惡くて仕方がない

彼は小聲で隣りの椅子の同伴にこぼした。

× ×

が其の內、不快な剃刀の刄ざわりが耐へきれなくなつて、

「やめて吳れ…………。

此の後、彼はもう剃刀を顏に當てないやうにした。だから喉ぎわも、顏も一面に生え放題、延び放題で、意地惡い獸見たいな顏になつてしまつた。で口の惡い仲間は彼をからかつて、

「オイ髯で床でも掃いて吳れ

躍氣になつたイワン・ミハイロウイチは鏡の前に立つたが、暫くたつと、プリ〳〵怒り出して、散髪屋を呼んで、

「オイツ、引ン拔けツ、糞ツー

之は六年前の出來事だつたのである……ところが今日ではスラリキチンとしたのを一着に及び、パイプを啣へて、外國人見たいな裝りの彼を外務省附近で見かけるだらう。外國流行の靴、着物、褐色皮手袋、ソフト帽に鼻眼鏡……之が往年のブデンヌイ軍の勇士イワン・ミハイロウイチならんとは。しかし彼は親しい者に述懐してよく言つた、

「でも、最初はとても具合が惡かつたよ

軍隊流が頭にこびりついてゐるので、外務省のクリエールとして、糊のついたカラーや、ネクタイやそのほかいろんな飾り道具をつけなけりやならぬことが、ざつぱり彼の氣に喰はなかつた。ネクタイ、カラー、釦鈕、ワイシャツなんかゞ文明的だとは阿呆らしい、堅い枷だ、枷だ。

だがそれはイワン・ミイロウイチにだけ苦しい枷であるかも知れない。そんなら元の自由さに戻つたらいゝじやないか……とでも言つたらどうだらう。彼はそんなことを云つても、その實、此の新裝をつけてることは丁度捕虜でも監視するときのやうな得意さを感じてゐるのだ。

彼はかうした悲哀と、得意の矛盾した感じを抱きつゝ或る時、始めて波蘭鐵道の或る驛頭に現はれた。食慾が催ふしたので早速と食堂にはいつた。彼は食堂內の誰彼がじろ／＼と眺めるので、きまりが惡くなり、テレ隱しに自分の足許をみつめながら腰を卸した。そして給仕を呼んだが給仕は

彼を見てる癖に聞えぬ振りをしてゐる。食卓を圍むだ彼方、此方の客達はドツと笑ひ出した。

「ハテナ、どうしたんだらう？　平服が似合はんのかな？

彼は夜目でチヨイと姿見を見たが、別にどうと云ふこともない。だのに彼奴等はまだ笑ひやがる、一向に腑に落ちないが彼ゝきまり惡る／＼心の裡で不思議がつてゐた。

フト、食堂にはいつて來る者共がみんな帽子を脫るのに氣がついた。之かな……と思ひながら彼も帽子を脫つてあたりを見廻はす、と、帳場に坐つてゐた太つちよの親爺と、給仕の奴等が云ひ合はしたやうに笑ひ出した。

之はイワン・ミハイロウイチが、自國と習慣を異にする外國で、始めて受けた小さい、深い印象であつた。

又或る時此のサウエートの外交官は外國にはミスターと云ふ敬稱のある事を胴忘れして相手をタワーリシチと呼び捨てハッと思ふ刹那に誰かゞ足を踏んだ。注意するための合圖であつたんだが、生憎とイワン・ミハイロウイチには通じなかつた。そして

「アツ痛い、なんだ人の足なんか踏んで……

昔は赤い兵隊さん、今はシルクハツトに黑燕尾服の彼の外國生活はこんなものである。彼は外國から、草深い田舍にくすぶつてゐる彼の親爺に自分の寫眞を送り、

「お父さんお前の息子の立派な姿を見て呉れ。」

と書き送つた。親爺からの返事には、
「あなたはどうされましたか、ブルジョアにでもなられましたか、それとも道化役者になつて芝居にでも出てゐますか、どつち道、生れ故郷に歸つて下さい……。

外國との秘密取引文

當方不幸續きにて弱り居り候、ラシエア伯母は死亡し、シモンクレム伯父も世を去り申し候ため、當方では悲しみの涙を拭ふハンケチにも不足しをり候が、貴方には御持合はせ無之候や御伺ひ申上げ候

尙ほ右のほか、小供ジーナ・ミーシャの兩人とも生憎靴および靴下を有せざるため外出もできず困却いたしをり候間右兩品至急御惠送被下度御願申上げ候

農夫と御役人

× ×

春が近づいた。農夫アンドレイ・スクルインニクにも種蒔きの時季が近まつた、而し彼は種子を持たなかつたので、たつた一つの財產たる乳牛を賣り拂つて種子を買ふことに決心した。

隣り郡のパウログラード町に牛賣りに出た彼は、偶然にも牛買ひに來た隣村の舊知の農夫に出つくわした。アンドレイは自分の苦しい內幕こそ話さなかつたが、兎に角一時間あまりの長話しの後に結局百四十四留で牛を手放すことにきめた。買手はポケツトから金を摑み出して勘定し始めた。

此の時折鞄を抱えた二人の男がやつて來て、何か書いた紙つ片（きれ）を見せて、此の牛は差押へられたといつた。アンドレイはブツたまげざるを得ない、大に抗辯して見たが二人の男は冷然と、そして

「わし等は税務署の者だ、お前らの投機を見のがすわけにやいかん、商賣するにや鑑札がいるじやないか、グズ〲云ふと公務執行妨害の罪まで被るぞと嚇かしつけた。牛は取上げられて役所の裏の馬小屋に追ひ込まれた。

此の一仕事を形付けた件の税務署のカタエフとシャムノウイチの二人は骨休めに一杯やらうとそこらの居酒屋に出かけた。其

の後に續いて泣きつ面のアンドレイと、牛の買手と、類例のない沒收に不審がつた外の農夫だちとがぞろ〳〵押しかけて來た。

税務署の者は歎願のためにわい〳〵云ひながら外に待つてゐる者達に眼もくれず、半時間ばかりと云ふものは愉快さうに飮み且つ喰つた、そして意氣揚々第二の居酒屋に這いり込んだ。

此處でも亦半時間ばかり飮み喰つた二人は農夫だちには口も利かなかつた、もつとも、もう强か醉つ拂つてゐたので思ふやうに喋れなくなつたからかも知れない。だが呂律の廻らぬながらも四十四留出せそしたら鑑札を下げてやらうとだけは云つた。アンドレイは

「そんな馬鹿氣たことがあるけえ、そりやいかん。

と悔やしがつたが泣く子と地頭、アンドレイは村の者から金を借りて、税務署から鑑札を貰ひ受け、其の足で財政監督部に訴へて出ると、よく取調べた上で鑑札料は取り戻してやるから其の税務吏員を捜して來いとのことだつた。

アンドレイは足を棒にして駈けづり廻つた揚句翌日になつて漸く捜し出した、そして二人の吏員は上役から脂を絞られた。アンドレイも溜飮が下がつた、そして鑑札を見せて牛の下げ渡しを申出ると、改めて罰金四十四留拂へとの嚴命、又がつかりしたアンドレイは色々と歎願したが監督部の役人は

「俺達は忙がしいッ！

罰金やら雜用やら何かと支拂つたアンドレイの財布の中にはたつた六十留殘つた。

「こんな無法なこたあない……

アンドレイは拙い筆蹟で莫斯科や地方の新聞に投書して革命とかいふものゝ無法さを憤慨した。

國防週間標語

軍事工業の發達を圖らん、小銃機關銃の製作能力を高めん、而してサウエート聯邦を難攻不落の要塞たらしめん。

愚痴

ヤプロンスキー

泥棒が一仕事したあとじや、大抵どこの泥的仲間だつて獲物の分け前で、いがみ合ふものサ。だから俺たちの社會主義國家だつてサ、十月革命が濟んでから、分捕品の分配で血眼になつたのも、マア無理はないサ。犬の群の中に肉一きれ投げてやつたやうにね……

釣鼻連中……オット失敬、猶太人……ジャない人民委員會のコミッサールさん達は偉い職にもありついてサ、大した羽振りだが、露西亞にや俺たちのやうに、酒池肉林の仲間入りどころか、その臭ひも嗅げないで不平不滿でその日を暮してる手合どもがウヨ〳〵してるんだよ。

それにしても、お偉い連中だちア、内亂の時にやうまく俺だちを煽て上げたもんだぜ、その口車にうつかり乘つたがこつちの過ちサ。ヘン煽てられていゝ氣になりやがつてサ、彌次馬の隊長になつてサ、西瓜のやうに人間をブチ切つたり、首を絞めてやつたり、燒いて粉にして吹き飛ばしたり、劍附鐵砲で一突きに刺し殺したりサ、これでも、その時にやサウエート露西亞のために無くちやならん人間だ位ひにや、うぬ惚れてゐたもんサ。お目出度かつたね。

ところがどうだい、戰爭も形づき、人殺しの役目もすんだ今日となつて見りや、ビール一杯飲む銅貨にも御不自由の態サ。それにさん〴〵俺だちをコキ使つた揚句、俺だちのお蔭でコミ

ッサールかなんかに出世しやがつた奴らア、滅法高い毛皮を卷きつけたり、ダイヤなんか光らした色女と自働車で乘廻はしてやがる、畜生ッ、俺だちあ電車賃も煙草代も足らないんだぜ。

今に見ろ、釣鼻奴ッ、鼻のまがるほど、オット、曲つた鼻のひつこむほどヒッぱたいて呉れるから。怒つてるなあ俺ばかりじやねえぞ。釣鼻奴ッ、今どろびく〳〵し出したつてもう遲いや。ナニ、ナニ、青年の風紀頽廢を嘆ずつて、ルナチャルスキーが此の間演説したつて？人を馬鹿にしてやがらあ、俺も聞いたよ、かう云やがるんだよ奴ア。我々は專門家を優遇せにやならん、それにや高い毛皮も、ダイヤも色女も大目に見て置かなけりや、奴らに逃げ出されちや國家の大損だから我慢して呉れつてサ。そして手前らの仲間の贅澤は云はないんだよ、イヤ云へないのサ、文部大臣かなんか知らんが、かう圖々しいこと云つてたが、氣がとがめるかして冷汗ながしてたぜ。

でもちつたあ感心してやつてもいゝよ、毛皮も、ダイヤも、女も社會主義建設の大事業に必要であります、なんて思ひ切つたことを云つた奴ア今までなかつたからなあ……●

カリーニンと農夫

……獨逸のある新聞より……

カリーニン（中央執行委員會長）は民情視察のために、よく田舍廻はりをする。そして親しく農夫等と語り、サウエート政治について、彼等の意向を聞くことを樂しみにしてゐる。でも大概の農夫達は遠慮していゝ加減のことしか云はないのが常であるが、或る村で最近かういふ問答があつた。

農夫「土地や自由が俺たちのものかどうか知らんが、そんなものは駄目だよ。俺なんか帝政の時にや何時もズボンを三着も持つてたもんだが、今じやたつた一着さ。自由のためにズボン二着寄附したと思やよからうがね。

カリーニン「自由といふものは、お前たちのズボンより尊いもんじや。亞弗利加の黒ん坊は年がら年中はだかで暮してる。昔の偉い學者は、これがほんとの理想境じやと感服したさうな、亞弗利加の民族は誰もズボンなざあはいてゐないよ。

農夫「ヱ、體に何も着てゐないんですか？

農夫はしばし考へ込んでゐたが

……じやあ、亞弗利加といふところにや、きつと三十年も前からサウエートの政治が行はれてゐるんだ……

といつた。

反革命運動近況

ウクライナの反革命的密偵を掃滅することは最早全然不可能で、多數の密行者が盛んに國境を通過して入り込みつゝある、最近二團體が逮捕されたが、彼等はウクライナ人民委員會宛の爆彈を所持して居た。

官僚主義と勞働者の議員

……哈爾賓右黨派露紙が、現代サウエート露西亞の會議の狀態を諷刺したもの……

職業組合や、產業組合の會議は大抵、ながつたらしい時間を費やすのが例だ、夜の十二時過ぎても終らぬことなぞは珍らしくはない。勞働者のペトロフは朝起きると、妻君に向つて

——今日も職業組合の寄合ひに顏を出さにやならんとサ、何時ものやうに荷物をまとめてくれ

といつた。妻君はほつとため息をついて

——ぢやまた明日の朝までお茶も碌に飲めませんね、ほんとにつまりませんね

——つまらない野郎が出しやばつて辯じ立てでもしたら明日の晩までかかるよ

——では枕も荷物の中に入れておきませうか

——きまつてらあ、今はじめて會議に出るんじやあるまいし、歸りも何時になるか判らんよ、無論枕はいるサ

——あの毛布も持つてゐらつしやいよ

——イヤいらねえ、この間なんか馬鹿にペチカを焚くんで暑くてやりきれなかつた、毛布なんかいらんよ

——でも毛布なしで土間にごろ寢するなんて外聞が惡いじやないの

——それもさうだな、持つて行くことにしやうか

身仕度も出來た、ペトロフは戰さうに荷物をかついで會議に出かけていつた。

議長が會議成立を宣告してから、議事に入り十七ケ條の日程が提出された頃、ペトロフは樂に休めるやうに、そろ〳〵荷物を解きはじめた

——第一議案、職業組合會議を活氣あらしめる方法如何……○○君に四十分間だけ發言を許します

と、議長が宣告すると

——長くはやりませんが、せめて一時間だけ發言を許して頂きたいが……

○○君といふのは議長にねだつた。

——フン一時間ぐらひで奴が止めるもんか

ペトロフはなほも毛布を敷き直しながら、かうつぶやいた。外の議員連中も大概ペトロフ黨だ。會議の空氣はザツトこんなものであるが、報告書には型の通りに

「當日の會議は熱心に議事を行ひ、且つ靜粛に、而も緊張裡に演說を聽取せり

と記載してある、だが雷鳴のやうな、白河夜船議員の鼾聲聞ゆとは、無論記載してない。

不良青年

……昨年八月の共産黨機關紙プラウダ所載……

サウエートの不良青年は驅け出しの青二才とまつたく無頼漢になりきつた奴とに區別することが出來る。驅け出しの奴は、ややもすると娘共の前で强がつて見せたり、齒の浮くやうな、聞くに堪えぬ空お世辭を振りまく辭に、通行人に惡口たたいたり、小競合ひしたりする。こんなのは驅け出しの通有性であるが、古顔の方ではこんなことは恥として擯斥する。自分はソコレンニクで、計らずも古顔不良青年共のやり口を實見した。

鼠色のリューとした服を一着に及んで、胸には深紅の薔薇の花を挿してゐる。そしてすばしつこさうで、癇高い聲を持つた、所謂驅け出しの不良青年をとつつかまへて居るところであつた。

「止まれッ！」

と驅け出しを呼び止めた。そしてあたりを見廻はしておいて、驅け出しの頬つぺたをピシャーッと張り廻はした。

「痛いッ！」

驅け出しが叫ばうとする前に、何か小聲で、丁度犬でも叱るときのやうに一言いふと、驅け出しは直ぐに默つてしまつた。

「コラッ！、有難うご座いますと禮を云

へ、早くいはんか、いはんとまたひつ叩くぞ！」

驅け出しは目をパチクリさせて、横着さうな苦笑しながら、小聲で

「有難うご座います！」

古顔の不良はハッハッと笑ひながら、連れの漢と行つてしまつた。驅け出しも何處かに姿を隱した、ひつ叩かれても誰にも訴えやうともしない。一方は教育してやるつもり、一方は教育されてゐる心持ち。一方は弱い者を苛めたり、娘共に巫山戯けたり、醉拂つたりして今日一日を暮す。一方も何時かは胸に深紅の薔薇の花を挿して先輩を眞似るやうになるのだ。

自分はまた、ロストフ市のナハロフカ區の不良青年どもの惡戯の實例を覺えてゐる。ナハロフカといふのはナハル……厚顔無恥……から來た地名だから、その地區一帶に住んでゐる連中は、無法律、無道德を標榜したのが多いが、此のナハロフカの不良共は、闇夜にこのあたりの娘共を見送つて來る市中の店員とか、理髪職人とか、時計職人などを苛めるのが好きなやうだ。

愛人を見送つて來た色男は、家の入口で愛人と分れる。まづ無難だ。口笛でも鳴らして意氣揚々と家路につくところだ。と物影からツカツカと赤帶をしめて、漆塗りの長靴をはいた、怪しい男共が近寄つて來る。

「オイッ、俺達にや怖がらんでもいいが、此の赤帶にや敬意を表せろ！」

こんな奴に見つかつたが百年目だ。

「煙草を一本よこせ！」

煙草入を差し出す。その間に赤帶共は店員を取り巻いてだん〳〵と嘲弄し始める。

「オイッ、この垣の上に登れッー！」

と、一人の赤帶が顎をシャクる。

「垣の上に？……どうしてですか？……」

「登れッ、登らんとひつぱたくぞ！」

店員はベソをかき乍ら垣根に登る。

「鶏の啼き聲をして見ろ！」

がや〳〵と赤帶どもが囃かす。時はもう眞夜中だ。何の因果か此の店員は垣根の上で、恐ろしさに震ひながら、仕方なく鶏の啼き眞似をする。赤帶は喜んで囃したてる。

「もつと上手にやれ！」

氣の早い奴が鶏の尻ぺたをなぐりつけると、皆が我れ勝ちに鶏の折檻を始める。その上に散々嘲弄し、持ち金を捲き上げてからやつと放免するのだ。

だが鶏の啼き眞似ぐらひはまだ〳〵優しい方だ。ひどい時には貧民窟のやうな、ナハロフカの、悪臭紛々たる汚水溜のところに連れて行つて

「サア此處で泳げッ！」

「これぱつかりはどうぞ勘忍して下さい、僕の服はまだ新しいんですから」

だが歎願されたからつて承知するやうな手合じやない。

「コラッ泳げといふのに！」

◇　◇　◇

お墨付

莫斯科　ウイクトル・キン

去年の秋、著者シエイコは徴兵されて黒海艦隊に編入された、若者は水兵としての艦内生活、人参色髮の掌帆長、海から飛び上る魚、子供のやうに大きな魚のことなど物識らぬ田舎の老親達に、誇らしげに手紙を出した。

又親達にしても、シエイコが舵手に教育されてゐることが滅法界嬉しかつた、息子がグイと舵を廻はすと、でつかい船も、大砲も、何百の人間も、一緒に方向を換ゆるのだ。

そこで、親達は息子の利發であつたことや、頭のいゝ人間でないと勤まらぬ仕事をやつてることなどを、近所近邊に盛んに吹聽してあるいた。をらも、こんなに老込んでしまつただから、何も樂しみはないのに息子の出世を自慢せずにほつとけるかね、とひとり嬉がつてゐた。

ところが、一月になつて、非常に重要な手紙が、船から郷里のボクロフスキーに着いた、封筒にはシエイコの母アンナ・シエイコが息子の功勞に對し〳〵國家から食糧を

供給するもの也）といふ證明の判を押した書付けがはいつてゐた。之はまつたく、思ひがけぬ喜びであつたのだ、屋根の雨漏りも繕はねばならなかつた、窓硝子もはめねばならなかつた、年のせいで、靴も柔かいのが欲しかつた、だが修繕費も買物の金もなかつた。

　そこに、だしぬけに、幸福が舞ひ込んで來たものだから親達はとても嬉しくて、もうボーツとしてしまつた。と同時に、お上がどうして、こちとらの雨漏りや、堅い靴や、紙で張つた硝子窓の破れに氣がついて、貧乏を憐れんでくれたのか、さつぱり不思議でならなかつた。お上からお墨付を頂いた老親達は、かうなると、どこか普通一般の人民どもよりか偉いやうな氣がし出した、大した位でも貰つたやうな嬉しさがグン／＼と胸にこみ上げてならなかつた。

　爺さんは婆さん同道で給養局を訪ね、お墨付を見せると、お墨付きの通り本當に頂戴物が出來ると云はれた、だがシエイコの老母は連れの爺さんと夫婦だといふ證明書を出せといふので、ずつと昔、結婚したサラトフ市に出掛けて之を貰つて來ねばならなかつた。

　サラトフ市に省いた爺さんは件の證明書の下附を願ひ出すと、閑さうな娘事務員が下附されるまで、一月はかゝるだらふと云つたので、爺さんは一先づ村に歸つて、一月後にまたサラトフに出て來た、ところが證明書はもう郵便でボクロフスキーに送つて終つたとのことで、質朴な爺さんは自分

の無識を詫びながら歸つて、半月があひだ、彼方此方と搜しまわつたが、自宅は勿論ボクロフスキーのどの役所にもそんな物を受取つてはゐなかつた。

　爺さんが三度、サラトフ市に出向いたのは、雪も解けかゝり、野原も黒ずんだ頃だつた、例の閑さうな娘事務員は怪訝な顔をして机の中を調べたが、なあんのことだ、證明書はまだ彼女の引出しの中にあるじやないか、なんでも爺さんに卜八錢の收入印紙を貼らせるのを忘れてそのまゝにして置いたのだと云ふ、又彼女は國庫金で立替へることは職務上良心が咎めてならなかつたと云ふ。で彼女は主任のところに行つて、爺さんに收入印紙を貼らせてから、すぐに手交せうか、それとも郵便で送らうかと伺つた。

　どうした具合か、その日のサラトフ市戸籍役場の調子が狂ふてゐたと見えて、證明書はすぐと願人に手交された、爺さんはボクロフスキーに歸つて給養局に出頭すると、今度は村役場について農業に從事してゐないといふ證明書を貰つて來いと云はれた。

　日と時間はどし／＼流れて行く、その上いろんな新しい證明書が必要で、又方々の役所に出掛けなけりやならなかつた、林業局にも行つた、工場修繕中のため本局の人夫の仕事をしてゐないと云ふ證明書が入用だからださうな、林業局ではそんなものは出せないと云ふので、職業組合に行つた、そこから職業紹介所に廻はされ、又林業局

に逆戻りしたシエイコ老人は、雪解けの泥靴で役所の床を汚しながら、外來者控室に腰をおろした。

　呼び出しを待つ約一時間といふもの、爺さんは小使や、番人に息子の親孝行、美しい黑海、大きな魚、海の魚などの話しをするが、誰しも自分の心配ごともあるので、一向爺さんの自慢話しの相手になつてくれぬ。

　どうやら證明書を貰つた老人は、今度は第二區婦人勞働部に行つて、家屋檢査を願はねばならなかつた、でそこから二人の婦人が代表として來てくれて、見取り書を書いてくれシエイコ婆さんにも署名の代りにペンで記號を書かせた、爺さんは再び婦人勞働部に出頭すると、斷髮した老婦人の主任が現はれて、愉快さうに笑ひながら、

「見取り書は無くなりましたよ、どうせあんなものはいらぬでせう。」

と頓と平氣、おまけに窓から春が覗いてゐるだの、四月の風が空の雲を追ひ廻はしてゐるだの一向要領を得ないことばかししやべつた。而しながら更に婦人勞働部で證明書を貰ひ、老妻の勞働不能を醫師に證明して貰はねばならなかつた、老人らしい、人のいゝ、質朴なシエイコ老人はペコ〱頭を下げながら、いろんな役所を廻はつて、到るところで孝行で偉い息子の話しをしてあるいた。

　いつの間にか、老人の顏にはめつきり皺がふえた、目付も何となく悲哀になつた、だが老人は知り合ひや、近隣の者に逢ふと

相變らずニコ〱してゐた、それは、彼が他人を不快がらせることを懼れたからである、又軍艦を操縦してゐる息子や、その息子が送つてくれた大事な〱お墨付の手前、他人に弱味を見せられないからだ。

（完）

愛人に送る文

貴孃の賢明なる、全く以て敬慕の念に耐へず候、就ては萬障御繰り合はせの上今夕拙宅に御來遊被下度く御待ち申上げ候今夕の話題は『生と性について、演說者小生、補足演說者、貴孃』右終つて討論に入るべく候。

二伸　小生は充分の敎養あり、かつ身分も純プロレタリヤに有之候へども、目下失業中につき、將來愛の結晶生ぜし場合、その扶養費負擔の義務を負ひ申さず候間豫め御了承置き下され度く候。

名教授

コリツオフ

コリツオフは當代露西亞の代表的諷刺文學家である。左記は共産黨機關紙プラウダ紙上（今年五月二十四日）に寄せたものである。

工藝學校で、共産黨員たるボーシンといふ教員が、同校の一女生徒にむかつて

「性交についてどんな覺悟をしてゐるか？」

と、とんでもないことを質問した。女生徒たちは耻かしがつて、無論なんとも口がきけなかつた。教員は不滿氣に×印を生徒の名簿につけた。それから又他の女生徒に

「男にも子宮があるかどうか？」

と訊いた。この女生徒も答へなかつた

「知らない？　よをし、それではどうして春になれば女は異性が戀しくなるか云つてごらん」

と追窮した。女生徒はとうとう、下うつむいてしまつた。

「これも知らんか、それでは今度はどうしたら春情を抑制することが出來るか……」

自分は又、かやうな質問を發する教員を實地に見たことがある。教員は一人の男生徒の名を呼んで

「君は娘の尻ばかり追ひまはつてゐるが、一體どこで、どんなことしたか云つて見ろ」

と問ふた、生徒だちはどつと笑ひ出した。

その時、教員は全生徒にむかつて尋ねた

「小馬には乳房がいくつあるか？」

一つです……二つです……三つです……交はる〲生徒は答へた。教室にはまたもや笑ひ聲が起つた。

サウエートの學校にはかやうな教員が教鞭をとつてゐるのだ。

反革命運動近況

ワルソー通信

有名なパルチザン隊長クリモフの率ふる部隊は、ミンスク附近で歩兵大隊を襲撃し、交戰數十分の後全大隊の武裝を解除し、大隊武庫を押收した、此の戰鬪に於ける赤軍の死傷者は可なりの多數に上つたが、パルチザン隊の損害は極く輕少であつた。

官僚主義……………コリツオフ

……共産黨機關紙プラウダ紙所載……

から世智辛くなつて來ては、死ぬことも出來やしない。葬式を出すのも一通りや、二通りでない手數がかゝるからだ。實際やたらに役人風を吹かしたり、下らぬことに杓子定基を振り廻はす解らず屋の多いのには困つたもので、生れるのにも、死ぬるのにも、役所の屆出でや、手續の七面倒なことは御話しにならぬほどだ。その生きた實例にかういふのがある。

つひこの間、ボゴロドスク市のある文士が私に話して吳れた噓のやうな實例だ。文士の友人の妻君が産氣づいたので、公立産兒院に驅けつけたが、とう／＼入り口のところで産んでしまつた。夫は妻君が産氣づくと同時に手續上必要なので、町の職業組合に判をもらひに走つたのであつた。

ところで産兒院長は、産婦にむかつて、職業組合の會員手帖に、會費納入の判を押したのを持つて來ないと、産婦も赤ん坊も引き取るわけに參らぬ。とケンもホロロの挨拶だ。驚いたね産婦は

だつてもう産れたんですもの、もし死にでもしたらどうしますか。

と苦痛を忍んで訴へたが、官僚式な院長先生は平氣の平左だ。そして墓地の方を指して

死んだらあちらに屆け出なさい。それとも手續がすむまで、も一度赤ん坊を腹の中に納めますかね……。

これは噓じやない、官僚先生と、産婦との眞面目な應答であつた。いくら佛蘭西の産科大博士だつて赤ん坊を二度と再び腹の中に收められるものぢやない。

産婦の夫は十八年から二十六年末まで赤軍に從軍して評判のよかつた者だ。昨年十一月に除隊となつたので、ある勤務に轉じたが、彼の手には軍隊手帖も黨員章も渡されたほど、身分には一點疑ひのない立派な證明をしてゐるのであるが、官僚式な手續上から見て、これも何の役に立たなかつたのである。

持てる支那人

支那人の共産主義者でロシアの各大學に入學する者には、毎月廿留乃至廿五留の學費が支給され、國際農業大學の聽講生には七十五留、共産大學の聽講生には百二十留の學費を支給することになつて居る。

面白い芝居

……共産黨機關紙
プラウダ紙六月二十二日……

今年の二月二日の夜の事だ、後貝加爾は知多驛に「郊外行列車」が停止してゐる。列車の發車が遅れたので、乘客たちは車外に出て、雪の中をあるいたり、驛の構內に腰かけたりして、今か〳〵と發車を待つてゐる。そこゝに貼つてある「煙草のむべからず」……「紙屑捨つべからず」……「日廻草（セミチカ）の皮を散らすな」……「靜肅を守らるべし」……等々の貼紙をもう何度も讀み直ほした。果はお客同士の話しの種も盡き、夜も次第に更けて行くのに汽車はまだ一向に出さうにない。

乘客の大部分は多知工場で働く勞働者の連中で、夜が明けたらまた工場に出て働かねばならぬ體だから、彼等にとつては一分間でも大切な時間なのだ。だのに如何なる譯で今夜に限つて發車が遅れるのか、誰一人として知つてゐる者はなかつた。

ところが、夜も更けてもう明け方近くなつた頃、發車を待ちくたびれてゐる乘客の間に鐵道長官コルネフがまだ妻君連れで芝居見物中だから、それで驛では汽車を出さないのだといふ噂が、それからそれへと傳はつた。で何故早く芝居から歸らないのかといふと、木戸錢は拂つたし、それに芝居が面白いから途中で起ちたくないので、その芝居がハネて長官が驛に來さへすれば、汽車はすぐと發車するんだといふ。この噂は本當であつた。長官夫婦はその晩の戀愛劇がすつかり氣にいつちまつて、芝居がハネる頃に漸く電話で發車準備を驛長に命じた。

乘客達の癇癪玉が破裂し、かん〳〵に怒つたのはいふ迄もない。が芝居がハネて長官夫婦が列車內の人となつた頃には、乘客達は晝の勞働の疲れと、空腹と、寒さとで、もう長官に喰つてかゝらうといふ元氣もなくなつてしまつた。芝居の後でダンスや餘興が無くて濟んだのがまだ、不幸中の幸ひだとあきらめる者さへあつた。

或る元氣なのが長官に向つて、……「貴下は共産黨員であり、かつまた重要な地位に在り

ながら芝居見物のために、列車を出さないなんか實に怪しからん」……と詰め寄せると、長官は……「餘計なことをいふな、君達が文句を並べる幕じやない」……と嘲笑したさうだ。

知多市で發行する「後員加爾・勞働者」紙は無論コルネフ長官の非行を槍玉に揚げた。同紙は諷刺文欄でもつて、……「斯樣なことは社會主義國家において恕すべからざる曲事である、よろしく法律上の制裁を加ゆべしだ」……とまでやつた。監督機關ではいろ〳〵と議論が起つた揚句、長官にたいしては、今後かゝることを繰返さないやうに勸告することゝなつて鳧がついたはよいが、一方の新聞社にたいしても、長官の行爲を諷刺した文章の書き方が恕すべからざる筆法だから注意せろと來た。

變だね、一體どの筆法が惡いのだらう？……諷刺欄には成る程、休養のために妻子の待てる我家に歸らんとする、疲勞せる百五十名の人々を虐げ云々との文句はあつた。が何故此の筆法が惡いんだ。どこが恕すべからざる點だ。あの諷刺文が社會の秩序を紊し、國民の品位を傷け、或は政府に不利を招いたとでもいふんだらうか？……イヤさうじやない、

社會の暗黒面を殊更ら外部にさらけ出すことそのことが、官僚主義根性から見て、恕すべからずといふのだらう。そしてどうだ、右のやうな喧嘩兩成敗の決議文が麗々しく新聞紙上に掲げられても、今日まで誰さへ抗議しやうともしない。

▲繁文縟禮

この船は君非常に早い船だよ、一時間に十五哩つてレコードを作つた船だからナ。

レコードなんかを作らせなかつたら、まだ早く走るだらうに。

▲證據調べ

リンドバークつて先生は、大西洋を無着陸で飛んだそうだが偉いもんだネ。

だが一體、實際無着陸で飛んだつて證明を何處の役所で發給したんだらう。

ドウナ村の事件

ゾーリッチ

七月四日、夏の熱い陽で乾ききつてゐる誰かの古納屋がどつと燃え上つた。風向きが悪いので村中が火に舐められさうだ。バケツ、嵩口、鍬、鋤、古襤褸なんぞを小脇に掻い込んだ人間共が、臊々と火炎を吹き上げる火元に吸ひ寄せられるやうに駈け集まる。

村では丁度近村の學校教師の集會があつてゐたので彼等も大騒ぎで馳けつけた。近所の井戸で釣瓶をたぐる者、兩手に水一杯のバケツを、胸を前に尻を後に突き出してフツフと家鴨のやうに走る者、燃えさしの小柱を嵩口にひつかけ、畠に曳きづり出してはヂリ〳〵と青草の叢にすりつけて火を消す者、突き當る者、躓づいても地に這はない先に起ち上つて又走り出す者などなか〳〵の騒ぎだ。

幸ひにも火の手は次第に鎭まり、隣家の類焼も免れさうになつた。びつしよりと汗と水に濡れ、黒ン坊のやうに煙に燻りきつた百姓達は火事場近くの畠の中に勞れた體をドツト

卸して、タツタ今の火事についてガヤ〳〵と高聲に話してゐる、その時そこにやつて來た民警長は、百姓達の外にまだ十人ばかり服裝の變つた連中が居ることに氣がつかずに、顎をしやくり出して

「オイツ、起ち上つてモツト水を運ばんか

傲慢ちきな怒聲に驚いてすぐ起ち上がる者や、不精無精に腰を叩いて起ち上がる者もあつたが、大概はセセラ笑つて聞えぬ振りしてゐた、民警長はこれを見てグツト癪にさはつた

「コラツ、起たんか、南京蟲屋（拘留所）に放り込むぞツ

その時民警長の傍にやつて來た執行委員會の幹部が

「まあ〳〵ほつときなさい、ありやみんな學校の先生達だから、明白になつて云ふてきかせるから

ととりなし顔した。狂犬のやうな民警長の態度にプツト脹れてゐた教師達はその言葉で一段と怒つてしまつた。己れ見ろ壁新聞の投書ものだぞと腹の中できめて、澁々起ち上つて

皆なバケツを提げた。

翌朝早く教師達の集會に出席した件の執行委員會の幹部の眼には逸早く壁新聞紙上の非難の投書を見た、デ、彼は壇上に上ると緊急動議を提議し、さも憎々しげに

「わしはここに集まつてゐられる諸君が地方政權の倒壞を計畫されてゐると聞き込んだが、わしは地方の執行委員の一人として絶對にかやうな運動を容赦することは出來ない、又徹底的に一掃せにやならん役目を持つてゐることを承知して貰ひませうと、言ひ放つて壁新聞を剝いで證據物件として郷執行委員會に送つた。ところがその委員會は至極冷淡で、また壁新聞記事も政權云々などいふやうな不穩なものじやなかつた。

これではならぬと今度は民警長が武裝民警の一隊を率ゐて教師の集會場に乘り込み、ピストルを振り廻はして教師共の反革命運動を全滅せにやならぬと威嚇極論した、だが反對の聲がどつと起つて民警長の威嚇も物になりさうにない、と見てとつた職業組合の書記長を勤めてゐるプレシコといふ民警次長は

「全露職業同盟會本部の名によつて我輩はここに委員會を開く、先づ議長選擧……

その怒鳴り聲の終らない内に教師達はみな席を蹴つて會場から出ていつてしまつた。

おいてけ放りを喰つたプレシコは地段駄踏んで悔やしがつた、そして拳骨に唾を吐きかけて

「サテは君達は社會革命黨員だつたんだな！反共産主義だな、ヨシツ武力に訴ゆるぞツ

赤軍と猶太人

歐洲大戰前、露西亞軍隊内には兵卒の四%だけ猶太人がゐたが、今では二%に減つた。その他赤軍中には將校四・八%。下士一・六%。士官學校生徒四・八%の猶太人がゐると。(伯林、猶太學院調査)

官僚主義

ミハイル・コリツォフ

……プラウダ紙三月五日……

元軍人のシネリコフ君は子供の出生屆を出す必要があつて警察署に出頭したが、警察では身分證明書も渡して吳れないし、軍隊手帳に記載した生年月日を信用しないで、戸籍謄本を出せと要求した。で謄本を持つてゐないシ君は、郷里のバラショフ郡役所が內亂戰で燒かれて、文書類はみな燒失したから、謄本を出すことが出來ないと屆出した。警察から一ケ月經つてから證據書類が無けりや、身分證明書も渡せないと通知して來たかと思ふとまた一ケ月ばかりして今度は、生年月日、生地、洗禮を授けた僧侶、寺院名を書き入れた願書を差し出せといつて來たので、シ君はその通りに書いて出したところが、また一ケ月ほどたつて、郡役所の書類が燒けて無くなつたことの參考書類を提出せろと來た。で色々と參考書類を集めて差出したが、またぞろ一ケ月も待たせた揚句、いろ〳〵の難題を吹き

かけられたので、これも我慢して命令通りになつてゐると、今度は兩親の證明書が入用だといふ。でシ君は

『私の父親は五年前に死んだし、母親はサラトフ縣にゐるから母のも取れない』

と答へた。ところが警察官と醫者は笑ひながら

『それは規則だから仕方がない、それが出來なけりや身分證明書も、居住證明書も持たずに居給へ、持たないと國法に問はれるまでサ』

とぬかしたので、シ君もとう〳〵怒り出した。

『孫の出產屆に、死んだ祖父の署名を必要とするやうな馬鹿な規則が何處の世界にあるか、その規則を見せて貰ひませう』

と迫つた。すると警察官は成丈高になつて

『人民に規則書を見せることは出來ない、我が國の法律規則は、社會主義建設事業と同樣に每日芽生えてゐるのだ、警察官の外規則なんか見るものじやない』

と放言した。シ君は呆れ返つて物が云へなかつたが、元氣を出して、手續中にもう大部肥立つた我が子の出産屆を書式通り兎に角作つて出した。

露西亞の農家數

サウエート聯邦内の農家數は昨年度は二千三百五十七萬戸であつたが、今年度は二千四百十萬戸に增加した。

喧嘩

—ゾシチエンコ小話集より—

昨日、僕は汽車で町に行かうと思つて停車場に出掛けた。ところが驛長室の傍らのプラットホームで喧嘩が始まつてゐる。つまり人間の擲り合ひサ、僕の住んでゐるレニングラードの郊外の、この別莊地は實に閑靜な所で、大聲をはり上げて騷ぐものも醉つ拂ひも、なんにも無いといつていゝ位ひつそりした土地柄で、智識勞働者とか文化の先驅者なんていふ連中の住ひには誂へ向きのところである。

といつても、一ケ月中何時も靜かなわけではない。例外デーもあれば例外週間もある。土曜日、日曜日月曜日は例外デーで、お祭り日は勿論、それから給料日も同樣で、これ等の例外日はとても騷々しくてうつかり外出も出來ない。ありとあらゆる騷音、奇聲、喚聲、が聞える。つまり私が汽車に乘らうとしたのはこの例外日だつたのである。

二人の市民が擲り合つてゐる、一人はビール瓶を片手に持ち、一人はバラライカで所謂防禦軍の態度である……防禦軍は弱味があるものだが、この先生はバラライカの鋭い角で充分に對抗が出來た。二人の擲り合ひ、とつ組み合ひが

だん／＼烈しくなつた頃、第三者たる一人の男が二人の中に割り込んで、喧嘩を止めやうと、自分もビール瓶と、バラライカで擲られたり、傷けられ乍ら引き放さうと懸命になつてゐる。その中當事者だちはもう息も絶え／＼になつて來たので、僕は二人の命に別狀があつては大變だと、あたりを見廻すと幸ひすぐ近くに南京豆をぼつり／＼と噛つてゐる民警君を見つけた。すると私の側にゐた一人の男が

——オイ君、無駄なことするなよ、喧嘩してるのは土地の人間だよ、だから民警を呼んだつて來やしないよ

と云つた、私は不思議に思ひながら何故民警は來ないだらうかと聞いたらその男は

——民警が中にはいつて喧嘩を止めたり、また拘引したり、說論したりしやうもんなら後で土地の人間に酷い目に逢ふからかゝり合ひになるのを非常に恐れてゐるのサ。それでなくても土地の人間は民警のあら探しに一生懸命になつてゐるんだよ。こゝはレニングラードじやない、お互ひみんな友達同志の間柄じやないか。

と答へた。民警は相變らず南京豆を噛りながら時々退窟さうに此方を振り向いてゐる。喧嘩はだん／＼下火になり、遂ひには仲直りが出來三人が連れ立つて驛の方に手を組んで去つた。

◇　◇

サウエート社會相

穀潰し

……パンテレオン・ロマノフ短篇集より

オモチャ箱をひつくり返へしたやうな、亂雜な部屋の中に、こゝの屋敷番を勤めてゐる男が椅子に腰をかけてゐる。靴の修繕でもしたのか、足のまはりは、皮の切れつぱしが一杯に散らばつてゐる。それと向ひあつて話してゐるのは、今しがた隣りから遊びに來たらしい、油だらけの外套を着たまゝの、手足まで眞黑な、一見して火夫と見える男である。突然戸が開いた。頭を晙かさうに、キレで捲いて、後の方でキリツと結んだ小柄な年增女が部屋には入つて來た。屋敷番の女房である。

——チョイと、さつきお前さんの留守に三十號室の音樂家のお神さんが來てサ、どうぞ後生だから薪を割つてくれつて頼んでいつたよ。可愛相だからお前さん助けると思

つて割つてお上げよ、功徳になるよ——

屋敷番は女房の言ふことなんか耳に入らぬやうに、まだ役に立つのが有りさうなものだとでも考へてゐるらしく、足の下に散ばつてゐる皮のきれつぱしを足先きで掻き廻はしてゐる。

——ねえ、お隣りの旦那、ほんとにあのお神さんは可愛相だよ、薪を割る力なんかないんだよ。音樂屋の旦那には力業をさしちやいけないんだつてサ。それにお神さんは第一洗濯も出來ないし、重いものはパンだつて持てないつて、この間も私がパンを運んであげた位ひだよ

——畜生！　穀潰し奴、神さまの罰が當たるぞツ

屋敷番は大きな聲を出した。

——まつたくだ、小供の時から働きなれない人間は此の節ではもう駄目だよ

火夫先生も親友の屋敷番に共鳴した。屋敷番の女房は頭巾を外して床に投り出してから

——ほんとにお氣の氣な人達だよ。あの人達は昔は偉い人だつたんだつて、皆なが大さう尊敬してゐるよ

——フン、有名だか、偉かつたんだか知らねえが、今時にやもう通用しないや。有名な人間なら、まさか困りもすまいよ

——でも世の中が違つたから薪の割れない人間が困るのは無理はないサ

火夫先生は話を受けながら尙ほ云つた。

——お神さん、彼奴二人はね、一部屋に住んでサ、お負けに鞄も、行李も、家具も食器も、何でも持つてゐて、まるで船の食堂が時化のために引つくり返へつたやうに散ばつてるよ。飯の食へない音樂なんてどうして習ひやがつたんだらう

——今時は腕力で働く者でなけりや飯は食へないよ、音樂屋のやうに一生タララ、タララでは世間が通さない。だから飯が食へねえのサ

——だつて何故働かねえんだらう、何も音樂が社會に害毒を流すわけじやなしサ、ウ

ンとやつて呉れ、俺達あやかましいたあ申さない、此の頃はもう餘りやかましい世の中じやなしサ、何をやつたつて構はんじやねえか

と火夫先生は政治論でもオツ始めさうになつた、屋敷番は

――まあ〳〵聞いてくれ、この間もよ、鐵のペチカの煙突が壞はれたといつて來やがつたから俺あ行つてやつて、直ぐ仕事にかゝるとねえ兄弟、彼のあまの言ひ草が振つてるじやねえか、もし主人がこんな腕前があれば、どんなに心强いかしれません、人樣にご迷惑も掛けずに濟むのにつてサ、それだけならまだいゝが、歐洲中の人が私の主人のことを知つてゐて、一度でも主人の歌ふのを聞くと皆んな涙を流すほど有名な人なんですよ、と自慢しやがつた。お負けに飯時なのにサ、お茶一つ出すじやなし、臺所に置いてある肉の方ばかり掻つ拂はれはせんかと見てやがる、そして私達はもうご飯は濟んだから遠慮せずに仕事して呉れと云ひやがつたぜ。

今の世の中は働く者でなけりや甘い飯は食へねえ、第一お前え洗濯屋を見ろ、いくら

金を儲けると思ふかい。この屋敷の中にだつてまだ昔の名人がゐるよ。ほら十六番には有名な女優がゐるじやねえか、あの女は矢張り一時は歐洲中に鳴り響いて、外國人はみんな花輪をやつたり、新聞に寫眞を載せたり、一寸したことまで書き立てたつて云ふじやねえか

――しかし今日じや誰も花束なんかやりやしないぜ

――社會的等級が違つたからだよ。奴等も苦しいので秋には勞働階級の何等給かに有りつくことになつたと云ふが、これもつまり少しでも餘計パンを得やうといふ一心からだよ

――一體どんな仕事だらうね

と火夫先生は聞いた。

――そんなことまでは判らん

この時女房は、

――あれまた音樂屋のお神さんがやつて來たよ

と外を眺めながら云つた。

――あんなあまは家の內に入れるな、留守だつて追つ拂つちまへ

と屋敷番は怒鳴つたが、音樂屋のお神さんは廊下まで出た女房に

――どうぞ是非少しでもいゝから薪を割つてやつて下さい、主人はこれから音樂會に行かなけりやならんのですから、今夜冷え切つたら働けませんから、ねえお願ひしますよ

と賴んでゐる。屋敷番はタララ、タララをやるのに何が冷え切るもんかと部屋の中で吹き出した、外からは

――主人はね、あなた方の爲めに演奏に出かけるのよ、何も物好きに音樂會に行くのじやないのよ

といふのが聞へる。女房は氣の毒になつて淚聲になつてゐる。內からは屋敷番は、入れちやいかんぞ、糞でも喰へだ、皆さんのためですよつて何事だと憤慨してゐる。

○

――一寸見てごらん、とう〳〵自分で薪割りに出て來たから

と女房が叫んだので二人は表を眺めた。帽子を眞深にかぶつた、長髮の、品のある男が薪一本と、鉈とを手にして外に立つてゐる。音樂家先生だ。

――奴もとう〳〵本當の勞働に從事する氣になつたんだよ、喜んでやれ

と屋敷番は云つた。そして音樂家は暫し兩手をさすつてから薪を割り始めた

――餓鬼の時分から神聖な勞働をやらない奴はほんとに氣の毒なものサ

と屋敷番は溜め息をした。

吹雪の歌

ア・ネウエロフ

一、

吹雪は晩方から始まつた。星も輝かず月も照らなかつた。大きな強い何者かが天地の間に起上つて光を消してしまつた。天は曇つて遠く、大地は輪廓を失つて次第に冷たい空虚へ溶け込んだ……茫漠たる曠野と方々にぽつり〳〵點在する村とは寒氣と恐怖に泣いた。黒い小家（イズバー）は乾燥してがさ〳〵した雪に溺れ、屋根ばかりがお互に顔を見合せてゐた。風は曇つた空間を狂ほしく馳廻つて雪に突進し、處々裸の土地を削つて凄まじく上に舞上り下を走り、凍えた道路標を倒し、曠野の細道を掃いた……

古い、頑丈に出來たウコル爺さんの風車は擴げた翼を惱ましく鳴らし、自然の侮辱を訴へ、自分の微力を恨んでゐる……翼の微かな呟きは村にも聞えてきた。それを聞いた者は誰でも心配してびく〳〵した……ウコル爺さんの風車は決して無事には鳴らないのである。

風車は永い年月の間村に立つてゐて、白髪の老人連でも嵐の時の風車の唸りは別だと信じてゐる……今夜も皆風車の音に耳を傾けてびく〳〵し、誰かゞ死ぬに違ひないと思つてゐた。

たゞ一人、これを恐れないで豐滿な最も美しい人生を考へてゐた者がある。それは曇つた、色彩の貧弱な彼の想像にして始めて描き得る人生であつた。この者は最もやくざな乞食のやうな本物の百姓アレフアであつた。彼は黒い小鳥のやうに、光も岸もない廣い曠野の空間に姿を隱したのである。

吹雪は烈しくなり、咆哮し、アレフアには眼前に大きな強い巨人でも立つてゐるやうに思はれた……巨人は寒氣と死を呼吸しながら、最初は珍らし氣にアレフアを眺めたが、やがて跳上つて彼の帽子を捥ぎとり、既に嘲弄的に彼の髯や眼に唾を吐きかけ始めた……間もなくアレフアには髯の代りに雪の塊が突出し眼の代りに細い穴と凍りついた眉毛とが殘つた……しかし今度のアレフアは頗る頑固勇敢で、自分もその曇つた夜に唾を吐きかけたの

である。何處かで囀んで、硝子のやうに銳い冷酷な雪に顏を打突けると誰にいふともなしに憤慨し始めた。

『えい、何をしやがるんだい？　本當に凍え死でもさせる氣かい？　ひどい冗談をしやがるな……どこかの店屋の親爺でも嚇かしやい〻に……でないな！　アレフアをさうしたいのだな……アレフアは臆病ぢあないぞ、泣きもせず恐れもしないぞ……俺の見たのはそんなものぢあない……いつだつたか九五年にさ……』

　しかし巨人は俄かにいやといふ程彼の脇腹を突いて外套を捲り上げ、彼の眼を全く塗り潰さうとした。アレフアは腐れか〻つた樹のやうに長い痩せた足を動かして雪の中に倒れ最早本眞劍に怒り出した。

『おや何だい、本當に突きやがつたな？　のぼせやがつて……』と彼は男性の言葉に移つた『俺か、俺でないのか！　ふん、凍え死させて見ろ……どうでもい〻や……だが言つて吳れ、誰が俺の子供を引取るんだ？　誰が薪の世話をするんだ？　俺の知つたことぢあないつて？　なんだ！……孤兒にさせて置いて後でお前を探せか？　そんなにしたけりや村へ行つてウコルの風車をやつつけるか、村長の家の煙突を折つてやれ――面白いぞ！……でなきや！　お前は多分折れるよ、薪を割る所ぢあない。力があるもの。十年でも歲を返して見ろ、それと暖い半外套と袖を、俺はお前から二十八の繩を編んでやるのに、でなくば俺は……』

　そしてアレフアは溫和しく露出した手と、外套とを示した。

『何だ、俺がお前にのし掛つたのかい？　お前の馬を盜むとかお前を馬鹿呼ばはりしたとでもいふのか？　俺の生活は虐げられてるんだ、他人は俺を侮辱するし、お前もそれが落ちだ……よく考へて見ろ。例へば俺を凍え死さす……俺は人間ぢあなくなる……誰の罪だ又それを隱し終せる……それがい〻と思ふか？　生きるだけ生きて死んでしまふ？　雪をぶつ掛けりやお終ひか？　子供は家で待つてゐて、窓を見てる。「どうして父さんは歸つてこないの？」と言ふだらう。いや、今死ぬものか。頭にや腦がある！……婆さんは薪を

持つてこいつて喧ましい……小屋にや火の氣がない。ペチカはぼろだ……薪はないし……お前一走りいつて見てきて呉れ！　どうしてるか俺はまだ知らないんだ？　兄弟、俺はつまちなく暮してるんだ、人間並ぢあない……』

アレフアは何時ものやうに、丁度市場で油や革を買ふ時主人が彼のいふことを聽いて與れて値段を負けてくれる外に煙草を御馳走してくれる時のやうに靜かに話した。

だが彼がいつもこうして話すのは、それが新しくて仕事に何等かの關係があるためではなく、單にそれに慣れて哀願するのが好きだからである。それ故誰にも同じことを話すとや、誰も彼の言ふことを聽いてゐないことなどは氣がつかなかつたのである……油の金を彼が拂ふのは他人の拂ふのと同じで、壜の秤り方は惡く、革は必ず腐つたのを與れたのである。

背に唾を吐いた意地の惡い巨人も、人々が彼のいふことを聽かぬと同樣アレフアの言ふことを聽かなかつた……巨人は最早單に彼の帽子を捥ぎ取るばかりでなく首を引拔き、足

を曲げ、その弱さを嘲笑し、やがては生命をも奪つて雪の上に肉體を棄てやうとしてゐるのだ。

かうしてアレフアは次第に廣い曠野の奥へ死を迎へに這込んで人生、豐滿な美しい人生のことを考へてゐた……彼はその人生がこの曠野のやうに暗く冷たく、頁につれて一年一々と進んでゐる退屈な讀み棄てた本のやうに面白くないことを昔から知り拔いてゐたのであるが、今、彼には何故かもう一度それを特に信じたいやうな氣がした。彼が何年か待つてゐた幸福、そして結局來なかつた幸福を信じたいやうな氣がした……彼も最初はその生活が必ず轉回すべきである、さうでなければ不公平であると信じてゐた。彼は一對の馬を養ひ、皮襖を修理し、羊皮の帽子と斑點のあるロマノフスキイの長靴を修理し、綾織とシヤツを子供に買ひ、妻には山羊の外套を買つてやるであらうと信じてゐた……

何處からかゝる『幸福』が來るのか――このことについては何故か考へたくなかつた。またアレフアはこれに解答を與へることが出來なかつたであらう。幸福は稀にしか來ない！

例へば田を耕やしにゆく、すると道に金のはいつた紙入が落ちてゐる……或はまた神の御慈悲で一デシヤチンに三十布度どころでなく、二百布度ぐらゐ收穫があるやうになる……それだけではあるまい！　幸福は至る處にある！　待つてゐなくても幸福は懐中に飛び込んでくる……

しかしアレフアが四十歳近くなつたとき、幸福は不相變やつて來なかつたので、彼も遂い成就しない或者としての幸福を信ずるのを止めた……そして只ひとつ、明日も今日のやうに何も食べるものがなく、何も火を焚くものがなく、誰に助けを求めることも出來ぬといふことを信ずるやうになつた……このやうな信念が彼の思想の根底に横はるやうになつたとき、彼は淋しく息苦しくなつてきた……この時から彼は火酒を飲んで自分の運命を訴へるやうになつた……最後の五十錢銀貨の音がすれば昔の歌を歌つて盃を眺めて泣き、何處かの塀の蔭に蹲るのである。

『俺がどんな人間か見てくれ。全部で八ウエルシヨクもある……誰に入用なのか考へてごらん……俺がみな飲んだんだ！……』

このやうに悟つた今、人生の目方を秤り、過去將來とも指折り數へて計算してくると、アレフアはまた急に大きな不可解な幸福が欲しくなつてきた。心から泪の出るほど欲しくなつてきた……そして夜がこんなに冷たく、雪がこんなに烈しく、曠野が空虚で無關心であり、生活が狹息しくじめ〳〵してゐるので、凍えきつた肉體はアレフアにこれらのことから逃げて自分の空想の中に睃まることを許さなかつたのである……

頭の中には種々の思想が鈍く動いて昂奮し、一種の明るい、良い、近く來る何物かで彼を刺戟したり安心させたりした。

二、

アレフアはオ……村の金持の所へ行つて、麵麭、ほんの麵麭だけを乞ふた。その他には何も乞はない……しかし誰一人として彼に物を與れる人はなかつた。そこでアレフアは人々と自分の貧困さに業を煮やし、居酒屋に寄つて頭〻捻つたのであるが、何を考へてゐるのかも忘れてしまつてゐた……退屈な空腹な人生は隱れて彼を離れ、絶望的な無力な彼一人を置き去りにしたのである。アレフアはじつと居酒屋の傍の雪の上に佇んで婚禮の歌を歌つてゐた。彼は、自分が結婚して新生活を始めてゐるのだといふやうな氣がした……完全無垢な人生が目の前に立つて、手招きして何か大なる謎のものを約束してゐる……アレ

フアがボルブトイルカだけ飲んだときには、もう火酒が無くなつてゐたので、彼はまたもとのやうに重苦しく退屈になつてしまつた。我家のペチカがぼろで、子供が飢えてゐるのを恨んで泣き出した……しばらく泣いてゐるうちに、アレフアは壁に凭つたまゝ雪の上で眠たくなつてきた。やがて彼は誰も彼の言ふことに耳を傾けて與れる者がない、自分は何人にとつては赤の他人で不必要な、寧ろ大人の辭に泪を流す奇妙な人間だといふことを悟つたので、考へた末家財道具を賣つて村へ出かけた……冬の夜の幕はまもなく降りた。暗黒が白い大地に濃く横はり、寒氣は烈しくなつて痛いほど鼻を引張り、脊中に這ひ込み、指を凍えさせた……

アレフアが村から出たとき、夜は全く彼を呑み込んだ。大きな強い何者かが彼の足許に動き、雪を投げ、恰も彼の弱さを笑ふやうに彼の脇腹を突付き始めた。アレフアは怒つて喧嘩腰になつたのだが、やがて頗る愉快になつてきた。雪の野、茫漠たる曠野は、近しい親身のやうに思はれ、自分は何不自由のない、何も要らぬ小さな小さな子供に急になつた

のである。また遠い少年の日の想ひ出もこの喜びに織り込まれた……人生は再び美しい綺麗な玩具のやうに思はれてきた。生きたくなつた。强い新しいそして一度も味つたことのないやうな希望が出てきた……。

頭の中はまたもや大きな、近く來る幸福に滿ちてきた……アレフアの頭だけに出てきさうた愚かな空想が、次から次へと列を作つてゐた。

そこで彼はかふ思ふのである。程遠からぬ所で、彼のすぐ側に金持の商人と地方長官とが馬に乘つて行く。二人は道に迷つたのである。アレフアは土地の人間だ。どの曠野の道も彼には解つてゐる。彼は二人の案内をすることになる。商人は百留やると約束する、約束するだけでなく直接彼の手にそれを握らせる。地方長官はアレフアが道さへ教へて村まで案内して吳れたら滯納の稅金を全部免除するとまで優しく出た。

アレフアはそれが事實であると思つたが、喜びのあまり何をしてゐゝか解らないので歌を歌ひ始めた……すると誰かが彼の口に唾を吐きかけていやといふ程突き飛ばした。アレ

フアは手をポケットに入れ、默つて考へ出した……どう考へても彼は急に大金持になつたのである。馬は小鳥ほどゐる……橇は薄地毛氈を張つたやうにある。庭には肥えた牝牛が二頭もある。水の代りに牛乳を飮み、牛酪は車に塗るほどある。まだその他に言へば……子供は長靴を履いて步いてゐる。彼自身は冬になると黑い羊皮の外套を着るし、夏には更紗の袖無外套と白い庇のある帽子を冠る……人はみな彼を『アレフイイ・ワシリチ先生』妻の方は『アウドチヤ・ミキシチナさん』と呼んで吳れる。アレフアは堪え切れないで、にやにや笑ひ出した。するとまた誰かが彼の耳を抓つた。彼の手は氷柱のやうに冷たくなつた。アレフアは指を口に啣へて强く呼吸を吐き掛け始めた。しかし、口の中も曠野そのものゝやうに冷たかつた……濕つた呼吸が出て、輕い白い結晶となつて髯に凍りつき、珍らしい房のやうに髭に粘りついた。また眼に這ひ上り薄い網となつて顏を蔽ふた。體は重く彈み、足は最早これ以上步くのを拒絕してゐた。さく／＼した雪は滿腹した馬のやうに狂ほしく曠野を走り、耳やシャツの中に飛び込んで、氣持惡く骨を刺し、首を冷たくした。

曇つた大空は大きな眼で小さな人間を眺め、その空虛な冷たい視線をうけるのは重苦しく恐ろしかつた。

「はやく村へ行かなきや！」とアレフアは立停つて靜かにあたりを見廻した。

「迷はないやうに！……」

足は頻りに痛む。頭は重く、睡氣を催ほした。稀に道標のある狹い道はいつしか足許から消え、彼は膝まで雪に沒して立つてゐた。風は足を拂ひ、泣き笑ひして何處へか走り去つた。

アレフアは雪の上に腰を下して、今死ぬのだと感じた。よき人生、近く來る幸福などの思想が斷片的にまだ走つてゐた。心臟は惱ましく動悸を打ち、血は冷たくなつた。

曇つた大空からは死が降つてきて、蹲つた人間を嘲笑ふやうに眺め、いかに雪が人間を埋め、また人間がいかに生きたいのかを見てゐるやうであつた……

アレフアは兩手で軟い雪の塊を抑へて立上らうとした。滿身の力を罩めて逃げ出さうと

か丶つたのである……頭の中には最早死から、死の恐怖から逃れるといふ希望ばかりがあつた……眼の前にはぼろのペチカ、冷たい小家、飢えた子供達が立つてゐた。

かうしてアレフアは何處へ行つてい丶か解らないで、益々曠野の方へ夢中になつて逃げ出した。彼は雪の層に踏み込んで倒れ、雪に顏を打突けたが、痛くも冷たくも感じなかつた。

しかし急に誰かが彼の脇腹を突き飛ばしたので彼は横に倒れてしまつた。風が彼を嬲つて外套を捲き上げ始めた。

「人殺しーツ！　た、助けて……」

聲は途切れて雪の中に慄え、幽かに空間に溺れて行つた。

アレフアは泣き出した。泪は靜かに眼から流れ、細い氷柱となつて頰に懸つた。やがて彼は凍えた指で十字を切り、仰向けに倒れたま丶、遠い暗い空を眺め始めた。

「神樣！　俺は死ぬだ……俺の罪を赦して下せえ……俺の子供をお願ひでがす……小さい

奴等だから……穀物を餘計に出來さして下せえ……税金のために牝牛を賣れなんて村長に言はさないで下せえ……俺はもう死ぬだ……』

アレフアは悲しげに大空を眺め、その短い勞働生活の罪を想ひ出した。

『俺は醉拂ひだから死ぬだ――神樣、罰しないで下せえ……飮まなきや生計があまり辛いでがす……神樣、赦して下せえ、馬鹿な人間を罰しないで下せえ……』

アレフアの頭から帽子が落ち、灰色の斑點となつて雪の上に横はつた。斑らな髮は雪に混つて白い房のやうに首へ垂れ懸つた。心臟は小さい球に固まつて、今にも死滅し活動をやめさうになつた……。

するとアレフアは急に暖かみを感じた。誰かの柔い手が凍え切つた體を煖め、數千の火となつて空虛な冷たい曠野を燃やしたのである……。

曠野は燃えて光りの火花に溢れた。

『まるで復活祭のやうだ！』とアレフアは思つた『あの太陽の光りはどうだ……この暖か

さはどうだ……が俺ばかりは……こゝにゐる……』

愉快さうな人達が笑ひさゞめいて歩いてゆく。中には新しい袖無服を着たアウドチヤも玉子を持つてゆく。彼女に續いてミシヤルカが走つてゆく……厚い不健康な腹と黃色の頸を有つてゐるミシヤルカが何んと瘦せて細いことだ……彼は何を泣いてゐるのか？ ミシヤルカは何處へか走つて行きながら細い弱い聲で泣いてゐる。教會では大きな鐘を力いつぱい打ち鳴らし、小さな鐘がこれに倣ひ、一種愉快な微笑むやうな光景を呈してゐる。

鐘が笑ふ、人々が笑ふ、太陽も笑ふ……愉快だ！ がミシヤルカは不相變走つて泣いてゐる。『麵麭が欲しいので俺を探してゐるのだ！』とアレフアは考へる。呼びとめたいのだが、唇は言ふのを拒絶してゐる。するとミシヤルカは急に大きな黑い人間に變つた……そして父の所へやつてくる。彼はアレフアの口を開けて雪の塊を詰めこむ。アレフアはまた叫びたくなる。しかし黑い人間を見るのが怖いので眼を閉ぢ、ぐつたりして遠くの愉快な噪音に耳を傾ける。再びアウドチヤが現はれ、彼女に次いで子供が現はれ、みな絕望的に

一齊に泣き出す。馬が惱まし氣に嘶く。暗黑の中からは、天井の拔けた小家と傾いた物置とぼろのペチカとが覗いてゐた……春……野……まだ見ぬ幸福……

大きくて重い、冷たくて鋭い何者かが彼の體と頭とにのし懸り、思想をぼんやりさせ始めた。アレフアは睡たくなつた。

『神樣！』と唇が無意識に呼いた『馬鹿な人間を罰しないで下せえ。子供等をお願ひでがす！』

優しい何者かが彼の體を煖め、子供のやうにあやした。アレフアは惱ましい泣くやうな吹雪の歌を聽きながら、頭を後に、目を空に揚げて眠つたのである。

曠野は無關心に眺めてゐた。たゞ近く、ごく近い所で、靜かに鐘が鳴り響いて夜を慄はしてゐた。風は彼の體の上を走り、冷酷ながさ〳〵した雪で彼を蔽ひ隱してゐた……

──完──

根と實

ウエーラ・インペル

コニヤーク酒が上等のものであるためには、それが古くなければならぬ。あるとき、小さな、半分は波蘭人のゐる街で、太陽に溶けた灰色がかつた黃玉のやうな、濃い黃色の一種のコニヤーク酒を私は御馳走になつたことがある。私は三杯ばかり飮んで醉拂つてしまつた。大地が頻りに宇宙の空間へ走つてゆくのを感じ、また家の主人が一人であるのに二人に見えるのを感じながら、私は溫和しくピアノの前に腰をかけ、樂譜の箱に凭れたまゝ晩までぐつすり寢入つたのであつた。私はこのお客好きな家から出るとき、もう普通の平常通りの樣子をしてゐた主人に訊いた。

「大層結構な御馳走でございましたわ、今日私が晝餐のとき頂いたのは何といふ御酒でございませうか？」

彼は微笑みもせずに丁寧に答へた。

「あれは普通のスリウヤンカですが、九十三年も經つた古い酒です」

その後、私はいろ〳〵の場合に、二三杯の思ひ出にすつかり醉つてしまふ老人達を見たことがある。その人達もやはり大地が走るのを見た。たゞ前に走るのでなく、後へ、彼等の青春の泉へ走るのである。その人達にもすべてのものが矢張り二重に見えた。ひとつは眞實のもので、ひとつは想像のものである。そして結局はやはり頗る强い飮料に甘やかされながら、部屋の隅などで寢入つてしまふのであつた……

私は自分が特別に記憶がつよいと誇ることは出來ない。といふのは、それがあまり古いものではないから。しかし私は今日、十五年前の思ひ出でも、悲しみや喜びを感ずるには充分な力を有つてゐるといふことを發見したのである……とにかく今、私の眼のすぐ前には一本の櫻の樹がある。それはあまり大きくはない。また見た所では非常に素朴である。そして一種の珍らしい實、飛切り大きな、汁の甘い實をこの世に送り出さうといふ空想も有つてはゐない。その實が小さく、酸ばくて蒼白いことだゞり切つてゐる。さうだ、太陽の光線の不足のため佝僂のやうに曲つたこの北國の樹が、少しでも華美といふやうなことを空想する筈がないのである。

この北國では夜も暗くない。一日に二度の天候があつて空を不眠症で苦しめてゐる。星も北國の櫻と同じやうに蒼白く、小さくて酸ぱい。そして私の櫻の樹は、このやうなぼんやりした夜の光りを浴びて弱々しい花を咲かせ、朝になつても冷たい薄暮の戰慄を充分に脫し切れないでゐる。

さて、これから思ひ出が始まるのである……

……

十七歲の頃、卒業試驗といへば地震のやうな災難に思はれた、そして地震に對抗することが出來ぬやうに、この試驗に對しても何とも仕樣がない。おまけにこの試驗は、教育家達は老練な殘酷性のおかげで何時も春に行はれ、夏の一部まで占領してしまふ。但し私もこの問題を善意に解釋すると、あまり教育家達を非難するにはあたらないと思ふ。私達の子供には、春が完全に與へられてゐるので、歩合の問題やヒリップ二世とニュージーランド人の戰爭で味をつけた春の夜の何たるやを知らない。試驗が南國で行はれる時には殊にさうである。

この南國の五月には、本當の素晴らしい暗い暖かい夜がある。この南國にはアカシヤのやうな樹がある。アカシヤの樹は北國の人を氣狂ひにすることもできる。一株のアカシヤは西洋櫻の森よりも銳い香を放つ。また西洋櫻の香が芳香と惡臭の境にあるとはあ、きの爭へない北國の苦味があるに反し、アカシヤの方は甘く、つよく、春の樹にふさはしい香りを發する。その上、この南國には海がある。昔、人類が現はれた初めに、人々は先づボートのやうなものを發明した。そこで家には數科書が待つてゐて舟遊びなどする時間のない月の夜でも、このボートは丁度北極が探險家を惹きつけるやうに學生を魅惑するのである。

私達の試驗が始まつた。舟遊びなど考へるどころでない。しかし私達（私と私の友逹）は、土耳古人と頗る不利益な媾和條約を結ぶ時のエカテリナを放り出して、園を通つて海へ走つてゆく、私達がずつとエカテリナの事を勉强してゐると兩親達に思はせるため、前以てランプは消さないでをく。

別莊での出來事である。私達は果實園を通つて走つてゆく。私達の家庭教師の大學生と私の弟が私達の後から櫂をもつて走つてくる「あの、ウエーラさん」と私の教師のヤコフ・マルコウイチが刺のある針金みたいなものを滑りながら囁く。「實際、僕は心配ですね。まだ算術のおさらひもしないし。殊に分數の乘法をね」

「大丈夫ですわ」私は斷崖から滑るやうに降りながら呟く。「私、知つてゐますわ分數に分

數を掛けるには。スリツパを脱がねばいけません。でないと、そこは砂ですもの……」

やがて海にきた。ボートの名前は「二・二」といふ。日中はそこで魚を釣つた。忘れられた板が惱ましい失神狀態から我に返り、冷氣に元氣よくなつて腰掛の下で音をたてゝゐる。「水が大變多いね」と私の弟のパワが困つたやうに言ふ。「汲み出すものがないや」

「汲み出すといへば」とヤコフ・マルコウイチは私の友達のリユバに言ふのである。「あなたはポンプを知つてゐますか？」

まあ、彼女は何も知らないのに！

水平線の上には、夕日のやうに大きな月が額を出す。私にはその月がこの夜くらゐ大きく見えたことはないやうに思はれる。海は靜かである。最初は銅色、やがて金色、遂には銀色の線が波の上を走る。月の海である。私達は櫂を投出す。ふんわりした快よい海の流れが靜かに私達を乘せてゆく。舟の水は次第に殖え、岸は次第に遠く、分數は次第に細かく、月は次第に高くなつてゆく。

私達は同じ道を歸途につく。唇が乾き、足が濡れてゐる。私達の果實園には、否、殘念ながら私達のでないが、素的な櫻が植えてある。もし月が太陽に似てゐるなら、この櫻は小さな李に似てゐる。櫻は月に映えて、實際は暗赤色なのであるが黑い色に見える。

世界のやうに古い眞理は、一番甘い實は盜んだ實だといふことである。晝餐のとき皿に盛つて出す櫻の實は、ピンで留めた蝶のやうに生命がないやうに思はれる。

私とリユバとはこの樹を見て立止つてしまふ。私はいつしか月に冷えた櫻の實の甘いふんわりした舌觸りを口中に感じてゐる。やが

て分數に分數を掛けることなどは、立方根のことなど言はなくても、この實を味はふだけで容易に私の頭に這入るやうにさへ思はれてくるのである。

「リユバさん」と私は言ふ。「あなた、どう思つて？」

しかしリユバは考へるどころでない。樹の下に立つたまゝ、彼女は櫻の實を兩手にいつぱい取つて一生懸命に食べてゐる。そこで私も食べる。私達の男連は、女の犯罪を奬勵しないため向ふの方へ行つて、何かを靜かに食べてゐる。やはり櫻の實ではなからうかと氣にかゝる。

盜んだ櫻の實の快樂が烈しくなつてゆくとき、園丁のオシプが針のやうに現はれてきた。彼は怒鳴り屋で怖い。リユバは夜の暗黑の中に消えてしまふ。しかし私は粒の多い魚卵を見たチエホフの輔祭のやうに快樂に夢中になつて、食べるのを止めることが出來ぬ。私は唯一の安全策として、白い塗料を塗つた幹へ出來るだけ近く身を寄せた。さうすると私の服も白いから容易に見つかるまいと思つたのである。

しかしオシプの眼は鋭い。おまけに、太陽のやうに海を照らす美しい滿月が私の役に立つて呉れない。月は遠慮なく櫻の樹を照らしたので、オシプが近づいてきて私の肩を譯もなく捉へてしまつた。私は心に惡いことをしたと思ひながら、口にはやはり櫻の實をいれてゐる。オシプの憤怒は恐ろしい。彼は何事にも躊躇しない。彼は私の現在を罵り、私の過去に影を投げ、また最も黑い色で私の將來を描くのである。

「女盜人になるですかい」と彼は嗄れた聲で

私の心を刺す。「御兩親は、いゝですか、うちの娘は大きくなつて便りになる、醫者か銀行員の所へ嫁にやらうとお思ひだ。ところが娘の方は丁度反對に不行儀な盗人になつて園を駈廻つてゐる始末。お前さんは學問を勉強なさる。だが、もう盗むなんて癖があるなら何にもならぬ。まあ明日はペトル・アドリアノウイチさんに話をしますだ」

私はこれを聞いて、恐怖のあまり耳が鳴つて眼がくらみさうである。遂に、私は水から出るやうに、徐々にこの狀態から脫出して言つた。

「オシプさん、お願です、どうぞ仰言らないで下さいね。私、ほんとにどうしたのか分らないんですもの。偶然こんなになつちあつたんですの」

しかしオシプは承知しない。

「言ひますだ、言ひますだ」

私は終夜まんぢりともしないでペトル・アドリアノウイチのことを考へる。試驗の前の恐怖でさへ、この恐怖の前には、飢餓の前の空腹のやうに靜まつてしまふ。ペトル・アドリアノウイチは別莊の主人である。小柄な、色白の温和しい老人だ。彼の生活の重な仕事といへば、薔薇と果實園である。私とリユバとは毎朝彼が鋏と虫眼鏡を持つて園を廻つてゐるのを見てゐる。彼は虫眼鏡を透かして枝を眺め、惡い蟲はゐないかと探してゐる。彼は人と會つても愛嬌がなく又あまり物を言はぬ。しかし私自身は、ある日の朝早く、私達がロモノソフで苦勞してゐるとき、彼の考へと違ふ所へ這つていつた蛞蝓に彼が話しかけてゐたのを聞いたことがある。

「なるほど」とペトル・アドリアノウイチは

綠色の房を鋏で均らしながら言つた。「なるほど、こゝには日がよく當るからな。しかし這ふのなら、ほら此處へ、この目標へ這つてこなけりや。それは淋しいが、しかし必要なんだよ、いゝかい」彼は頑固な枝を取つてゆく道を教へた。「ほら、こゝへだよ。その譯は、あとで梨が熟れてくると、お前達はお互ひに邪魔をすることになるからさ。誰にでも自分の場所といふものがあるのだよ」

それから彼は向ふへ行つて、露臺に腰をかけ、何か讀み始めた。しかし彼は讀みながらも、梨の邪魔をしようとした我儘な枝の方を時々眺めるのであつた。

ペトル・アドリアノウイチのすべて――彼のジヤケツ、彼の鋏、彼が植物と話が出來ることなどは私に大きな恐怖を感じさせた。彼があの夜の恐ろしい秘密をオシプから聞くなら、何か一風變つたことを仕出かすだらうと私は考へた。私は精神の苦痛のため靑くなつた。そして幾何の試驗の時には、一點を通過して二個の直線を引くことを得るやといふ試驗官の問題に對し、不可能なり、何となれば梨の熟するとき彼等は互ひに邪魔をする故なりと答へてしまつた。

美しい、又とない晩春の日が過ぎてゆく。勉強の餘暇に私とリユバとは大急ぎで一二種のクローケツト遊戯をして、まだ試驗を知らぬ幸福な若い人達に場所を讓つて歸るのであつた。

ところが暫らく經つて、私達がまた窓と海へ逃げ出し、歸途には例の櫻の魅力にひきつけられる夜がきた。月はもうなかつた。小さな瘦せた月が明方に一寸顏を出すだけで、夜の中は危險なものにはならない。夜は暗くて

犯罪には全く好都合であつた。學科の根は想像以上に苦しい。が櫻の實は甘いのだ。オシプでも、ペトル・アドリアノウイチでも私達を威かすことは出來なかつた。却つて私には一種の執着力があつた。私は恐れるのをやめた。私は核に大きな音をさせて甘さうな櫻の實を探すのであつた、

「あのオシプが來たとしても」と私は考へた。「私は同じことだ。ペトル・アドリアノウイチが來たとしても私は驚かぬ。私は彼に、人が試驗で苦しんでゐるときには、そのため何か樂しみがなければならぬと言はう」

しかしペトル・アドリアノウイチは來なかつた。オシプは地中にある櫻の核のやうに、ぐつすり寢入つてゐた。

二週間經つた。私とリユバとは試驗にパスした。私達の前にはあらゆる人生があつた。私達は、私達ほど幸福でない他の人達には愛嬌よく、つゝましく應接した。卒業證書を持つて街から歸つてくる途中、私達、殊に私は誰とでも話をした。リユバは、街から私達を乘せてきた輕鐵の車掌にまで、自分が將來醫者になること、自分の專門が內科であることなどを話した。

家のすぐ近くで私達は三色菫に水をやつてゐるオシプに會つた。

「おや、オシプさんですか」と私は愛嬌よく言つた。『何もかも濟みました。私達は全く自由の體になりましたから、畑であなたが蟲取りをなさるお手傳ひでも出來ますわ。あなたも、もうお歳を召して御隱居のときですもの。それはさうと、よくお寢みですのね！ついこの間私達はまたあなたの櫻の實を盜りましたが、目もお覺ましになりませんでした。

もう白狀してもいゝでせう、昔のことですから。私達も敏捷でしたわ。人生で大切なことは敏捷ですのね。私はもう誰方も怖くはありません。ペトル・アドリアノウイチさんでも怖くはありませんわ。そうあの方に仰言つてもいゝですわ。だけど櫻の實はほんとに美味かつたこと」

「まあ」とオシプは三色菫に呟いた。『わしの仕事は主人の仕事でがす。ペトル・アドリアノウイチさんはこの櫻や梨の番のため月給前拂ひでがすよ。若い娘さん達が盜んだと思つてるとして、それが愉快なんだらうと、わしも默つてた譯。わしの仕事はこうでがすよ。驛にゐた時より二錢だけ多く、右金正に受領候也つて。そこでわしも默つてるんでがす」

私も默つた。

かうして青春の日のイリユジオンは終りを告げた。そして成熟期が始まつたのであつた。

（をはり）

昭和五年四月廿五日印刷
昭和五年五月一日發行

定價五圓

編輯發行兼印刷人　岩田壽

東京市芝區烏森町五番地
印刷所　安久社

東京市丸ノ內ビルヂング八九一區
發行所　露西亞通信社
電話丸ノ內二〇三三番
振替東京六一五〇八番

5M-27